
キマグレセカイ

fyin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キマグレセカイ

【Nコード】

N0910K

【作者名】

f y i n

【あらすじ】

神様のきまぐれで異世界に（？）

面白いこと大好き女子高校生がトリップしてそこでのゲームに巻き込まれていく。

とりあえず魔王城に居候朗してるけど・・・

紳士口調で若干お人よしな主人公はそれなりに楽しんでます！

HPからの転載です。

キマグレプロローグ！

これは、魔王にも聞いたこと・・・

「キミは・・・何のために、戦うのかな？」

ワタシはボロボロの少年を見下ろしながら聞いた。

「護る・・・ため、だ・・・」

少年は顔を上げ、ワタシを睨みながら言う・・・その真っ直ぐな目を見て、ワタシの好奇心がうずいた。

笑みを深くし、少年に言う。

「気に入ったよ、少年。」

クルリと反転し、仲間でもないのに今まで一緒にいた人達に言った。

「ワタシは勇者側につくよ・・・こちらの方が、退屈せずすみそうだからね？」

おどけるように言えば当然、抗議は言われる・・・頭の堅そうな眼鏡に。

「なっ・・・貴様、裏切る気か！」

その言葉にワタシはクスリと冷笑する。

「裏切るもなにも、ワタシは貴方たちとお仲間になった覚えはないよ？」

挑発的なワタシの物言いに、あちら側のボスである魔王ことリオは愉快そうに笑った。

「いいよ？別に、僕はかまわないから。」

「さすがリオ。キミはわかっているね。」

クスクスと笑いながら、からかうように賞賛する。

「でもね？ 嗚音……」

声が間近で聞こえ、振り返る。

驚いた……いつのまにか、リオがすぐ前まで来ていた。

「敵側に行くのなら、僕は君を奪うから……覚悟しておいてね……?」

いつもはしないような妖笑で、ワタシに言った……

「いっておいで？ 嘎音……今日は見逃してあげるから。」

背を押され、彼のもとへ走りよりしがむ。

「おい、少年いきているかい？」

彼は今にも死にそうな怪我を負っている……ので、確認してあげた。

ワタシって優しいだろう？

「……デメエがこんな怪我負わせたんだろが……」

うん、そうだったね。

「はいはい大丈夫だよ、今治してあげるから……」

そう言い、ワタシは手を彼に向ける……白い光が彼を包み、怪

「治療完了！君達の拠点はどこかな？少年、イメージしてくれればいけるよ？」

少年こと勇者に言つ。

「お前は……こちら側につくのか？」

「随分とマセたしゃべり方するのだね、少年勇者君？」

「はぐらかすな。質問に答えろ、ヤミイロ。」

睨んでくる少年にワタシはわざとらしく肩を竦め、答える。

「はぐらかしている気は無いのだが・・・大丈夫、ワタシはもともとあちら側についていたわけではないからね・・・面白そうな方につくつもりだったからいいのだよ。」

フードでみえないかもしれないが、一応困ったような表情を作っておいた。

「信用、出来るのか？」

あらかじめ疑ってくる少年に、ゆつくりと言った。

「あなた方が裏切らないかぎりは・・・ね。」

少年はフツと笑い、差し伸べたワタシの手をとった。

少年を立ち上げらせ、魔王組の方を振り返る・・・

フードは外さずに、ニツコリと笑った。

「ワタシの名は、悲月^{ヒツキシヤノン}唄音・・・勇者側につくよ。」

キマグレプロローグ！（後書き）

他サイトで連載してるこの小説・・・
なんとなくはじめてみた！！

キマゲレ？！

「ひゝまゝだ！！」

その辺の石を蹴りながらつぶやく。

ワタシは今スゴク暇だ・・・面白いコトの一つや二つ起きてはくれないだろうか。

イヤ凡人であるワタシがおこがましいこととはわかっているのだよ？顔も体型も並で・・・

頭の回転は速いほうだと思っけど・・・あと声かな、アルトとテナーの間くらい・・・

（聞いていて心地いい声って言われたけどそれだけなワタシだしね。）

誰もいないし、暇だったので・・・大好きな歌を歌ってみる。

『私は堕とされた この世界に・・・』

醜いセカイ憎いの このセカイ

美しいセカイ愛しいの このセカイ

くすみ輝くこのセカイ

笑みも涙もあるこのセカイ

愛しいセカイ

憎いセカイ

アナタはどちら？

私は・・・』

ピタリ、と歌うのを止めた。

何故かと言えば、ココ何処だと言つ事態だから。

「なんだ・・・・・・・・？ココ・・・」

何故だか真つ白な空間にいるワタシ。

（ほんとドロ？さつきまで近所の道路だったのに・・・）

キヨロキヨロと辺りを見回していたら、白い髪に白い瞳のお兄さんがでてきた。

「ようこそ・・・ここは」

「さつさと返していただきたい。」

「・・・・・・・・」

あらら、黙っちゃったよこの人。

キマゲレ?! (後書き)

神様登場。

・

「人の話は最後まで聞くものだと言わなかったか？」

「教えてもらうほど不しつけでもなかったのですね。」

だつて急に知らない所に連れてこられたら混乱して誰だつて礼儀の一つや二つくらい忘れるさ。

「なんか厄介事に巻き込まれそうな雰囲気でしたから……ね？」

「ね？じゃない。暇だ暇だとぶつくさ言っていたからこの俺様がわざわざ呼んでやったのだ！」

おや、俺様だなんて今時珍しいね……それとワタシは『面白いことがないかな』であつて『厄介事に巻き込まれたい』訳じゃないのだよ。

「じゃあ……白髪青年。」

凄く嫌そうな顔されたけども気にしないでおこつか。

美形なのにこの神様は中身が若干残念ならしい……

「え、事実だけでも酷くない？これ若白髪じゃないよ？もともとこんな色なんだから。地味に傷つくよ？」

イヤだつてほら、他に特徴らしい特徴ないし……嫌なら名前くらい名乗れよ。

「俺の名は、セスだ。」

「覚えやすい名で結構なことだね、で？セス君・・・ワタシに何をやらせてくれるんだい？詰まらない事だったら殴り飛ばすよ？」

ニイ、と妖しく笑いながら言う・・・それにセスは若干怯みながら答えた。

「異世界に行って適当に動いてもらう。」

・・・・・・はい？

「それだけかな？」

他にもツツコミどころはあるけれど。

というか異世界なんてあるのだね。まあまだ真実かどうかはわからないけれど。

「ああ、それだけだ

・・・っておいしい！！　まだ詰まんないって決まってるじゃないじゃん！その振り上げた拳しまってくださいお願いだから！」

とりあえずワタシが無言で拳を振り上げたらセスは早口でそう言うってきた。

「イヤ、一発殴っておこうかな・・・なんて？」

「爽やかな笑顔でそんな物騒なこと言わないでください！」

ああ、説明しようかと思っていたけどもういい！！向こうで直接誰かに聞け！」

セスが言い終わったら、急に目の前が真っ暗になった。
え、ナニコレ！

『向こうで生き残れるくらいの力は与えておいたからな

・・・何かとイメージしたり精霊に呼びかけたりしら使えるぞ。』

闇の中で、セスが言った気がした。

イヤ・・・意味わかんないからねキミ。

ああ、あの小説読み終わってなかったな・・・ってか受験前なのだけど、高三なのだけど・・・

なんて、意識が薄れいく中、とりとめもなくどうでもいいこと考えた。

・（後書き）

ギャグは書きにくい

キマグレ？！

次に目が覚めたら知らない街の中に立っていた。

辺りに人はいない・・・けれど、違和感はそれだけではないらしかった。

並ぶ家々は中世どこぞの様な感じのデザイン、そして今は夜らしく暗い・・・無人の街が無駄に恐ろしい。

ワタシは街を出た・・・

暫く行くと深い森があった。

これまた薄気味悪いもりだとは思うが、進まなければ何もないだろう・・・探検って結構好きな方だしね？

「あ・・・この格好は不味いよね・・・」

ふと思いついた。

今のワタシの格好だ・・・黒ワイシャツに黒チエツクの膝丈上スカート、黒いショートブーツ、下校中だったからねえ。

町並みをみたかぎりじゃあ、服装もそれなりなのだろうか・・・とりあえずマントでも被っておけばいいよね

自分でもどうかと思うけどしょうがないじゃないか・・・

（えー・・・と、イメージすればだいたいのは出来ると言っていたね？）

シスの言葉を頼りにフード付きのローブをイメージし、手のひらを自分に向けてみる。

「へえ・・・すごいな。」

次の瞬間、思わず感嘆の声をあげた。

ワタシは闇色のローブをまとっていたのだ・・・中の服は変えて

いないけど、まあ見えないしいいだろう。

面白くなりそうなこと・・・そうだな・・・

性別、偽ってみようかな、ワタシ声だけでならどっちかわかんないし、その方が面白そうだしね。

そんなことを考えていたら、遠くから悲鳴っぽい声が聞こえた・・・

・
フードを深く被り、そちらの方へ急ぐ。

声の主は化け物に襲われていた。

・
(メイドみたいな格好だな……)

普通さ、逆だよな……異世界に来たヒロインが襲われてソレをイケメンが助けてくれるというのがセオリーだよな……まあ、ヒロインなんて柄じゃあないから仕方ないよね……

悲しくなんかないよ！

「下がっていてくれるかな？お嬢さん。危ないから……ね？」
護るべく前に立つと、化け物が向かってきた。

地面が槍のように突き出す様子を思い浮かべる……と、その通りになり化け物は槍に貫かれた。

化け物はグツタリとして、血が槍を伝う。

「大丈夫でしたか？」

しゃがみ込んでいるメイドさんに手を差し伸べる。

ワタシは女性に優しくがモットーなんだよ？

「あ……ありがとうございます……」

おずおずと、ワタシの手をとった。

(可愛いなあ、もう……)

決して、レズなわけではない……立ち上がらせ、問う。

「お嬢さん、こんなところで何をしていたのかな？」

「あ……はい、僕は城の使いで……手紙を届けに行った帰りでした。」

……城？

「ふうん？そうなのかい、でも一人じゃ危ないよ？……そう
だ、ワタシが送っていつてあげようか。」

自分の顔がほころぶのがわかる……面白く、なりそうだ。

「ええ！？そんな！申し訳ないです……」

「いいよ、ワタシの勝手に言い出したことなのだから……ね？」
少々強引だが、乗りかかった船……逃がすわけにはいかない。

「で、キミは誰の所に行きたいのかな？ 思い浮かべてごらん？」

「す、すみません・・・えっと、魔王様のところですよ・・・」

今だ申し訳なさそうに誤ってくるメイドさん・・・っていうか魔王ね、どういう人か、少し気にはなる・・・あ、そういえば・・・

「お名前は？ お嬢さん。」

・（後書き）

ちなみに連載してるサイトはもうキマグレ？まで終わってる。

キマゲレ？！

「リ、リシエラ……です。」

「フフツ、可愛いなあ……リシエラ嬢は。」

思ったことを言えば、リシエラ嬢はわかりやすくうるたえる。

「そそ、そんな……か、かわいいだなんて、あなた様みたいな
カッコいい方に言われると……」

「本当の事だよ？さて、お喋りもこのくらいにしておこうか。
……行くよ？」

「は、はい」

リシエラ嬢の手を取り、魔王のもとへ飛んだ。

一瞬で場面が切り替わった。

「ここであっているのかな？リシエラ嬢。」

「あ、はい……ありがとうございます！」

花がほころぶように笑って御礼を言うリシエラ嬢。

「いいんだよ？これくらいね……ところで、そこの方に用があ
ったんじゃないのかな？」

さつきからこちらの方をジッと見ているっぽいんだけど？

熱い視線が突き刺さるよ？モテる女は辛いね……はいスミマ
セン自重します。

「あ……すみません、リオ様。」

魔王が口を開いた。

「ねえリシエラ、その人……誰？」

「あ、ええ、と……そういえば、名前……」

そっいえば名乗ってなかったね、ワタシ。

「フフツ、名乗るほどの者でもないよ？それじゃ……」

そう言い、立ち去ろうとした・・・

「リシエラが世話になったね？お礼言いたいから、リシエラ出ていてくれない？報告は後でいいから。」

「はい・・・」

・・・格好良く立ち去ろうとしたのにね・・・リシエラ嬢の方が出て行ってしまったよ。

改めて魔王を見る。

綺麗な銀の短髪・・・長めの前髪から覗く深紅の瞳に白い肌、顔立ちも綺麗だね・・・

人懐っこい感じの笑顔だが、相手は魔王・・・油断は禁物。

キマゲレ?! (後書き)

やっと魔王登場。

自分に言い聞かせ、口を開く。

「お礼だなんて、ウソだろう？・・・何の用かな？」

「王に対してため口か？礼儀知らずだな。」

いつの間にか、翠髪のメガネ美形がいた・・・

「あいにくこの国の者でもないよ。いいだろう？魔王。」

ワタシが笑って魔王を見やると、彼は楽しそうに笑っていた。

「面白いね、キミ・・・いいよ？堅苦しいの嫌だし。」

「だとき、メガネ君？これでいいだろう？」

「クツ、しかし・・・っていうか俺はスイ「はいはいちょっと待ってね？」

メガネがそんなにイヤだったのか・・・

「ワタシは、敵か味方かわからない人たちに素性を明かす気はないのだよ・・・それなのにキミ達の名前とか聞いちゃったら対等じゃなくなる。だから、名前はまだ・・・ね？」

「クスクス・・・いいよ？じゃあキミは“ヤミイロ”でいいかな？」

まんまだね。

（闇色のローブだから、“ヤミイロ”ね・・・）

「いいよ？ワタシは・・・まあ、キミたちのコトは適当に呼ぶから。」

「うん、わかった。で、キミを呼び止めた本当の理由は・・・皆の前では言いくいから、僕の自室で待っていてくれない？後でいくから、今仕事中的なの。」

後でっていつなのかな？後でって・・・そしてココは見たところ書斎のようだね。

「あ・・・あの・・・」

わお、驚いた。

気が付いたら後ろにいたリシエラ嬢・・・この世界の人達は気配を消すのが得意なのかな？

「ご案内、致します。」

相変わらずオドオドしているリシエラ嬢に、微笑む。

「ありがとう、リシエラ嬢。案内、よろしくね？」

すると彼女は、分かりやすく頬を染めた。

アレ・・・ワタシ、なにかしたかな、本気で考え込むんだけど・・・

「ど、どうぞお先に・・・」

リシエラ嬢がドアを開けて先へとたもす。

「フフツ、では失礼するよ？」

部屋を出て、ワタシは暫くリシエラ嬢と話していた・・・

「へえ・・・驚いた、リシエラ嬢はヴァンパイアなのだね。」

リシエラ嬢がヴァンパイアなコトもだが、ソレよりも先にヴァンパイアが存在していたことに対してびつくりだよ。

本当驚いた・・・さすが異世界何でもありだね！

「はい、紅い目でわかるでしょう？ちなみに人間の血が一番好きなのですよ？」

「・・・へえ、紅い目ってコトは魔王もだよね？」

最後のセリフはスルーしたいね。

うん、ワタシは何も聞いてはいないよ？人間であること隠しておこうか。

「はい！アレ？結構有名な話ですが、知りませんでした？」

「恥ずかしながら田舎者でね・・・知識が乏しいのだよ。」

マズイ・・・と、いうか面白くない・・・異世界から来たことがバレルのは、もう少し先がいい気がする。

そして我ながらナイスフォローだ。

「・・・そうなんですか、でも・・・」

立ち止まり言葉を切って、ワタシをジッと見つめてくるリシェラ嬢。

「カ・・・強すぎますよね・・・ヤミイ口様。」

「それが、どうかしたのかな？」

「アナタ様程の方が、今までドコでくすぶっていたのでしょうか？」

先ほどまでのオドオドした感じが、消えている。

可愛い笑みはたやしていないが、この場では不釣合いでむしろ不気味だ。

・
なるほどね・・・

（情報収集して来いと言われでもしたのかな？）

「さあ？ソレよりも、先へ進まないかい？」

「そ、そうですね・・・すみません・・・」

もとの感じに戻った。

「フフッ、ワタシは今の方が好きだな。」

「そうですか？・・・うれしいです！」

「おっと・・・」

本当に嬉しそうな表情で、ワタシに抱きついてきた・・・身長はほぼ一緒だから、首に腕を巻きつけてぎゅーって感じで、当然体は密着して・・・違和感。

「・・・え？」

「気が付きました？」

あー・・・うん、気が付きたくなかったかな・・・コレは・・・

「僕、男ですよ？」

「・・・うん、わかったよ・・・可愛い子に抱きつかれて悪い気はしないけれども、離れてくれないかな？」

ワタシは可愛い子やものが大好きなのだよ。

「アナタの顔、見たいです・・・ダメですか？」

クッ、上目づかいは反則だよ・・・

「ダメだよ？まだ・・・ね？」

人差し指をたて、口へとあてながら言う。

「そうですか・・・残念です・・・」

「じゃ、離れてくれないかな？」

そう言つと、今度は離れてくれた。

そして、歩きながら喋りだす。

「人間の女、ですか。」

まあ、あれだけ密着すればわかるよねえ・・・出来れば、バレたくはなかったのけどね。

「別に、黙っていてあげてもいいですよ？」

「でもタダとはいかないんだよね？」

人間（血）が好きで、ワタシのコト気に入っているらしくて、なかなか聡明らしい彼が、何も要求してこないなんてありえないだろう。

「よくわかっていますね。」

「フフツ、都合の良い解釈は中々出来ない質だね？無償なんて、都合が良すぎるじゃないか。」

ワタシが言つと、リシエラは笑った・・・面白いものをみつけた子供のよう。

●
（後書き）

本当はかなり先まで進んでいるのですが・・・一日二ページくらいで。

とりあえずこの小説、女装男子にはまっていたときに書いたものですね！！

ちなみに俺、魔王と女装男子は大好きです！！（（（（

「いいね。本気で気に入ったよ、ヤミイロ・・・認めてあげる。」

認める？なんで・・・それじゃあ、まるでワタシを

「ためして、いたのかな？」

「ええ、そうです。貴女が大した事のないヒトなら・・・殺して
いました。」

その物言いに、ゾツとした。

ワタシ、一歩間違えたら死んでいたのか・・・それよりも、そう
いう事を当然のように言う彼が恐ろしいね。

「魔物に襲われていたときからずっと、演技だったね？」

「ククッ・・・そうですよ？よくわかりましたね・・・でもこの
格好は趣味ですよ？」

可愛くいつでも今更だよ、リシエラ。

うう・・・でも可愛い・・・

「条件、聞いてもらいますね？後で・・・」

どうやら目的の部屋に着いたらしい・・・だから、後で。

「ここまでありがとう、リシエラ・・・嬢・・・」

「僕的には嬢の方がいいです・・・これからよろしくお願いしま
すね？」

うん、不吉な四文字が聞こえた気がしたよ？『これから』なんて
・・・

リシエラが去っていった方向を、ワタシは呆然と見ていた・・・

「さっさと入れば？」

部屋の中から、魔王の声が聞こえた・・・アレ？おかしくないか

い？

だって書斎で仕事していたはず・・・まあ、いいか。

考えても仕方がないしね、この世界なんでもアリっぽいから・・・

「失礼するよ、魔王。」

言いながら、部屋へと入った。

「遅かったね、リシエラに気に入られた？」

「ああ、まあね・・・」

喜ぶべきか、またその逆かわからないけどね。

「そ、よかったね。」

よかったのだろうか・・・絶対適当に答えているよね。

笑顔が黒いから・・・

「で？魔王、皆の前で言えない用事ってなんだい？」

「うん、あのね・・・ゲーム、僕達の方につかない？」

うん、意味わからないよ？

・（後書き）

アレ？俺どこで話区切ってたっけ・・・とふと思った。

キマグレ?!

「突然なになぁ・・・ゲームって何のコト?」

「知らないの?」

何故か驚いた顔されたけど・・・本当知らないだよ。

有名な事なのかな?知ったかぶりでもしておけばよかったねえ。

「ああ、生憎と知識の乏しい田舎者でね。」

先程と同じ言い訳を言っておく。

矛盾点が発生したらややこしいから・・・

「全世界の人々が知っているはずなんだけど?」

墓穴掘ったね。

なんとか、動揺を悟られないよう切り返す・・・

「へえ・・・?例外もあるはずじゃないのかい?」

「言うね、神が直接このセカイの人達に伝えるのに?」

・・・返す、言葉がない。

魔王とか凄い笑顔だよ・・・眩しくて怖いんだけど。

「ヤミイロ・・・キミは、何者?」

はい絶体絶命だねワタシ・・・

「さぁ?ワタシはワタシだから・・・」

コレは、正確な答えかい?魔王。

魔王は暫く考えるような素振りをし、やがて口を開いた。

「いいよ?またそのうち、ね?仲間になるっていうのは?」

「それは・・・キミの敵を見てからにするよ。」

「ふうん?別にいいよ?じゃ、キミの部屋用意させるからそこに

泊まってる?」

ワタシ宿無しって言ったかな・・・まあいいか。

気にしてもしょうがないしね?

「じゃあ、そうさせてもらうよ。」

そう言い、部屋から出た。

「何もされませんでした？」

出て早々その質問はないと思うよ？リシェラ嬢。

「されてないよ。ところで、リシェラ嬢、ワタシの部屋はどこかな？」

「ああ、ここです。」

と、すぐ右隣の部屋のドアを開ける。

「……は？」

隣？あり得ないよね。

正体バレたらどうする気だい？

「ちなみに右隣は僕ですよ？」

「……そうか、ワタシはもう眠いから寝るよ？お休み。」

気にしない気にしない……ワタシは何も気にしないよ？

「深夜、お邪魔するね？」

「来なくていいから本気で。」

『冗談ですよ』とか言っているけど嘘だね……目が本気だったし口調もかわっていたよ、リシェラ嬢。

とりあえずスルーして、部屋へと入り当然鍵はしっかり掛ける。ベッドの上に転がったら睡魔が襲ってきた……そのまま、睡魔に任せて眠りへとおちていった。

眩しい……どうやら、朝のようだ。
「ん……」

「やっと起きたね。」

「……は？」

「魔……王？」

魔王がベッドに腰掛けてワタシの髪を梳いていた。

「何でここにいるんだい？」

起きあがり、魔王に問う……

「おはよう。」

イヤイヤそんな爽やかに言わないで下さいよ。

説明欲しいね、説明が……

「何をしているのかな？」

「ん？ナニってナニもシてないよ？」

字が違 う！

なんだか色々気になるけどまずは、色々ツッコミどころ満載だ
けどまずは……！

「鍵、閉めたよね？なんでいるのかな？」

・（後書き）

魔王は寝込みを襲ったりしませんよ．．．．．多分。

（T T ;）「

十二話目あたり結構魔王やバイですけども！！まだ先なので．．

キマゲレ？！

「暇だったし・・・それよりもさ、いいの？フードしてないけど。」

「気が付かなかった・・・どつりで視界がハッキリしていたのか。フードに手を伸ばしたが両手を捕まれ、そのまま押し倒された。」

「離してくれないかな？魔王。」

「そう言つと、魔王は至極楽しそうに笑つた。」

「ヤダ。名前、教えてくれたらいいよ？」

銀の髪がさらりと揺れた。

「何故かといえば、魔王が顔を近づけてきたから・・・」

「へえ・・・瞳まで黒いんだ？黒髪黒目なんて、随分と珍しいね。」

「言いながら、じつとワタシの目を見てくる。」

「はやく離れてくれないかな？」

ハッキリいつてももの凄く恥ずかしいのだよ、特にキミのような美形だと更に心臓に悪い・・・

「顔、赤いよ？かわいい。」

可愛くはないと思うけどな。

顔が赤いのはね？わかつているよ、わかつているから早く退いてくれ。」

しかし、あることに気が付いた・・・彼が見ているのは“ワタシではなく、ワタシの“珍しい黒い髪と目”なのだ。」

それに気が付いたら、なんだか平気になった。

「ハア・・・魔王、退け。」

あ、口調が命令口調になつちやつたじゃないか・・・まあいいね、別に。」

さっきまでの焦りや羞恥はどこかへ行ってしまったよ。

「つまらないね、ヤミイロ。」

・・・ハイ？ワタシがかい？

ワタシは面白さを求めただけだから、ワタシに面白さを求めないでくれるかな。

「僕が見ているのはキミなんだよ？」

は？

それじゃあ、さっきのワタシの解釈は完全に間違っているわけで・

そんなこんな考えていたら、唇に感じた柔らかい感触。

「……………!？」

キスされたと認識したときには、魔王はワタシから離れていた。

「急に、何をするのかな？」

再び起き上がり問うと、魔王は悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「わかってるでしょ？何されたかくらい。だからそんなに赤くなってるんじゃないの？」

ああ、本当に何を考えているのか……この青年は先が読めないな。

展開が読めないのは退屈しないが、それはワタシに害がない場合に限ってのコトだ。

これじゃあこっちの身が持ちそうにないというか貞操的なものが危うい気がする……

「……………もういいよ。で、魔王？ワタシに何か用があったわけじゃないのだね？」

さっき暇つぶしと言っていたしね。

「気が変わったよ。後で僕の部屋に来てくれる？」

「……………わかった。いいよ？別にね。」

「随分とあっさり了承したね、さっきあんなことした男の部屋に來いって言われてるんだよ？なんとも思わないの？」

いや冷静に考えたらワタシみたいなのに手出すわけないかと……

ワタシ美人でも八頭身でもないのだよ。

あ、悲しい自覚だね。

好かれるほど一緒にいたわけでもないしね・・・

「大丈夫だろう？」

多分。

だってこの方はなにをしてくるか分からないじゃないか。

「ふうん、じゃあ、お昼終わらせたら来てね？」

「わかったよ。」

フードを被りながら、言う。

魔王が扉から出て行く直前に、振り返った。

「楽しみにしててね？」

なにが!!？

何故だか物凄くイヤな予感がするのだがね・・・行くの、止めよ

うかな・・・

「ハア・・・」

「幸せが逃げますよ？」

・・・ワアビツクリ。

・（後書き）

ヤミイロ危機感0。

キマグレ?!

「リシエラ嬢、気配を消して後ろに立つのはやめてもらえるかな?」

心臓に悪い。

というか……

「リシエラ嬢は、メイドじゃないよね?」

「僕はリオ様の側近ですよ?」

女装趣味にコスプレ趣味? 違うよね、敵を欺くためだよな?

再び問おうと振り返ろうとしたら、後ろから抱きつかれた。

「ヤミイロ様って、隙だらけですよ。……. そんなんだから、唇奪われるんだよ。」

焦った……. 口調が変わったのもあるが、それ以上に見られていたことに。

「見ていたのか、趣味が悪いよ?」

顔、見られたかな?……

「僕ね? ヤミイロに用があつたから来たんだよ。」

急に話をかえたね。

何かな? 用って……. いやな予感しかしないのはワタシの気のせいかな?

「そんなに警戒しないでよ。……. 少し血を貰うだけだから。」

いやな予感的中じゃないか!

え、なに今日厄日?

「昨日言つたでしょ? タダで黙っていてあげるほど甘くないって。」

「

うん言っていたよ? でもね? なんで今なのかな?

「顔、見られたくないんだよね? 後ろから貰うから、安心して?」

あ、見られてないのか、よかった……. というか、後ろから

って怖さ倍増なのだけど？

「ワタシはどうすればいいのかな？」

「何もせず、じっとしていて下さい？首筋から貫きますからね？」

・・・怖いね、この状況。

フードを、下ろされた。

「ふうん、キレイな黒髪だね。」

ワタシの髪を見て、リシエラ嬢が言った。

さっきから口調コロコロ変わっているね、キミ。

次に、器用にもシャツのボタンを外しはじめた。

ねえ、妙に手馴れている気がするのは気のせいかい・・・？

「ねえ？リシエラ嬢、フード下ろしたりボタン外したりはワタシがしても良かった気がするのだから？」

「いやですねえ・・・脱がしてあげるのがいいに決まっているじゃないですか。」

わからないね、その趣味。

キミとは永遠に趣味は合わない気がするよ・・・合いたくないけど。

「下着も黒いんだ、いいね。」

「何を見ているのかな？何を。止めて頂きたいね、血を吸うだけなら早くしてくれないかな？」

本当に何を見ているんだ。

今ワタシ顔真つ赤だからね、見えていなくて本当よかった・・・

「じゃあ、貰いますね。」

言い、ワタシの首筋に牙を突き立てた。

「ッ・・・！」

い・・・た・・・

予想以上に、痛いね。

血を啜られていたのはほんの数分のはずだが、ワタシには結構な時間を感じられた・・・

「ごちそうさま。ヤミイロ、美味しかったよ？君の血。」

名残惜しそうに傷口を舐め、離れた。

うう・・・クラクラする、キミどのくらい飲んだの？

「リシエラ嬢・・・なんだかクラクラするのだから、どのくらい飲んだのかな？」

ニイ・・・と、リシエラ嬢が意味ありげに笑った。

「それじゃあ、リオの所にはいけないね。」

・・・はい？

それじゃあキミ、もしかしてそのために言い出したのかい？

「・・・・・・・・残念ながら魔王のもとには行くよ、そう言ったからね。」

だって行かなかったら後が怖そうだから。

「そう？ならいいけど・・・・・・・・」

ケド？

けどってなんだい？いやだなあ、今日イヤな予感しか出来ないよ・

・

「気を付けて？リオ、気に入ったものに関しては貪欲だから、ね？」

ね？じゃないよキミ。

なんだか、行く前から疲れた。

・**(後書き)**

リシエラは変態。

キマゲレ?! (前書き)

すみません、確かめてみたらもう???はもう終わってました。

キマゲレ?!

「いいニオイがするね、ヤミイロ?」

「そうかい?香水とかはつけていないけど?」

「違うよ。血のニオイがするって意味だよ?ヤミイロ。」

一瞬、思考が停止した。

何故、わかった?

表情とかは見られていないはずだから、動揺が悟られることは無いだろう……

「リシエラだね?」

「……よくわかったね?魔王。」

魔王も吸血鬼であることを、すっかり忘れていた……

「僕、人間の血はあまり好きではないけど……ヤミイロの血は好きになれるかもね?」

お気に召さなくて結構だよ。

何で凡人であるワタシの血がこうも気に入られるんだ……イヤ、まだ魔王は気に入るかどうかわからないじゃないか。

リシエラ嬢は事情があったからともかく、魔王とは何も無いから血を吸われるのは御免だね。

「他の人間と大して変わらないよ?」

「飲んでみないとわからないよ。」

「!?!」

純粹に驚いた……

瞬き一つの間、魔王がワタシの後ろにいたから……

抱き込まれたかと思ったら腕を捕まれ、リシエラ嬢に噛まれたところを舐められた。

「ッ……!」

ピクッ と、ワタシの体がゆれた。

声がでそうになるのを、必死に抑える・・・

そんなワタシの様子に気が付いたのか、魔王がクスクスと笑った。

「どうしたの？」

「なんでもない、とりあえず離れてくれないかな？」

そう言っても、離れる気配が全くない。

というかむしろ腕に力が入ったね・・・ワタシと魔王は結構な

身長差があるから、ワタシの頭は魔王の胸のあたり。

今ワタシは魔王の腕の中にスッポリ納まっている・・・抜け出そうにも抜け出せない。

・
「僕ね、最初ヤミイロのコト男だと思ってたんだよね・・・今日の朝見て驚いたよ。」

朝はこっちが吃驚だよ・・・顔見られちゃったしね。

「ヤミイロのいたトコロでは、みんなこんなに短いスカートなの？」
「ッ！」

言いつつ腿を撫でるな！

どれだけワタシが必死に押さえていると思っっているんだ！この魔王のコトだから絶対気付いている。

「ヤミイロの肌、キレイだね・・・」

今度はシャツの裾から手を入れてきて、背をなぞった。

やはりソレにも、ワタシの体は正直に反応する・・・

「魔、王・・・止め、てくれないか。」

手の動きを止めてくれ。

そして離れる。

「クスッ・・・イヤだ。ヤミイロも、我慢しないで？」

やっぱ気が付いていたのかコイツ！！

血を飲むだけじゃなかったのかな？いつの間に趣旨を変えた？

「・・・そうだね。血を、飲んであげようか。」

ブツリ・・・

首筋に鈍い痛み・・・けれど、それだけじゃなかった。

「ッ・・・んあ・・・はっ・・・」

吸血されたときに、甘い痺れがともなった。

「我慢できなかった？今の。」

「な、んだ？・・・今は・・・」

問うと、リオはクスクスと笑いながら答える・・・

「今のは毒みたいなもの。リシエラの時にしなかったのは多分、君の魔力がリシエラよりかなり大きかったからだと思うよ？この毒、相手の魔力が大きかったら打ち消されちゃうんだって。」

「そう、か……」

「ヤバイ……頭がクラクラする……」

さすがに、二度も吸血されるのはきついものがある。

今飲まれたのが少量とはいえ、その前のダメージもまだ残っているし……

「大丈夫？」

八割方キミのせいだよ、魔王。

ああ……でも心配してくれるあたりいい人なのかもしれない……

「それじゃ歩けないでしょ？ベッドで休んでいったら？」

と、ワタシをヒョイツと抱き上げて運びベッドへ横たえた。

・（後書き）

魔王手馴れてる・・・

そしてセクハラを魔王はスキンシップと言います。（。。。；）

被害者は当然ヤミイロ。

・

まではよかった・・・

「えつと・・・魔王？」

「なに？」

「どういう状況かな？これは・・・」

「僕がヤミイロを組み敷いている状況？」

そんな笑顔で答えないでくれ。

うん、わかった・・・魔王がいい人と思ったワタシが愚かだったから・・・前言撤回するから・・・

「どいてくれないかな？」

「名前・・・教えて？」

またか・・・

首を傾げて言う魔王・・・これが普通の状況なら『可愛いな・・・』とか微笑んでいたと思う。

けれど状況が状況なわけで・・・

「言ってくれないなら・・・犯すよ？」

「それは嫌だね。嫌だけでも教えられないね？」
うん嫌だ。

キミがいくら美形でも・・・ね？

ていうか、目が本気で怖いよ？

「ふうん・・・」

怖いよ、怖いって！

目が笑ってないよ魔王。

なんて考えていたら、魔王が首筋に顔を埋めてきた・・・

「ワタシなんて襲っても楽しくないよ？」

「どうだろうね？」

質問に質問で返されても・・・というか本気でヤバイ。
無理矢理脳を働かせて、魔王を押し退けた。

勿論、男に力で勝てるわけが無いので魔法を使ったが・・・思いの他力が強過ぎたようで

魔王は吹っ飛んで壁が破壊されてしまった・・・

「え、つと・・・とりあえず魔王大丈夫？」

魔王が人間じゃなくて本当によかった・・・人間なら死んでそう
だ。

「クスッ・・・少しでも悪いと思ってるんなら、名前教えて？」

あの・・・本気で怖いです・・・目が据わってる。

「殺すよ。」

・

「悲月^{ヒツキ}・・・ 嗶音^{シャノン}・・・ 嗶音が、名前だよ。」

こんなに命の危険感じたのは初めてだよ・・・ やっぱり魔王なんだね。

「シャノン、ね・・・ 僕はリオ・ランディツシュだよ。」
言って、ワタシにむかって手を差し出してきた・・・
立たせると・・・？

歩み寄り、手をにぎった・・・ 思ったら引き寄せられ、そのまま軽く触れるだけのキスをされた。

「つな・・・！」

「そう簡単に、人を信用しちゃダメだよ？ シャノン・・・」
耳元で言われ、羞恥でカアツと赤くなる。

「クスクス・・・ かわいい。」

耐え切れず、魔王から離れて部屋から出て行った。

ボタンツと強くドアを閉めた。

（今なら羞恥で死ねる・・・）

本気でそう思った。

ズルズルとしゃがみ込み顔を手で覆う。

まだ頬が熱い、触れられた唇が熱い・・・ ああ、ヤバイ泣きそう。

というかファーストキス、返せ馬鹿魔王が！

朝のに続きまたしても・・・ そんなに隙が多いのか？ ワタシは。彼氏できたことないし、というか初恋すらまだだ・・・

「はあ・・・」

今日二度目のため息、いや三度目かな？まあいいや。

とりあえず、今日厄日だ・・・もう誰にも会わないようにしよう。

・・・

・（後書き）

魔王は策士（いろんな意味で）。

すみません免許取得の勉強で一日更新できませんでした・・・。
。；（）。

キマグレ？！

あれから数日。

魔王は何事も無かったかのようにワタシと接した・・・若干セクハラじみたコトをしてはくるけど。

それはともかく、何だか今日は妙に騒がしい。

何かと通りすがりのメイドさんに聞いてみたら、何者かが城内に侵入したそうだ。

ここ一国の城だね？中心だね？大丈夫なの？そんなの許しちやって。

まいつか、気になるから搜してみよう。

魔王の城に侵入しようなんて勇氣のある人だね、たんなる馬鹿かもしれないけど・・・とりあえず、好奇心には勝てない。

との事で現在城内探索中。

「まあ、そんな簡単にはみつからないよねえ・・・」
上手く逃げているのだろう。

しかし、暫くすると前方が騒がしくなってきた、おそらくは近付いてきている。

すると、目の前の角から何者かが曲がって来た。
その者が侵入者だとわかる。

腕を引き、近くの部屋へと引き入れた。

「ッ！？な「シー・・・静かにして？」

後ろから口を素早く塞ぐ。

どうやら男のようだ。

結構な長身だったので、魔力で浮き彼の後ろから手を伸ばしている。

バタバタと外が騒がしい、それが去るのを待っていた。

「ふう・・・行つたね。」

軽く息を吐き、そう彼に言った。

「何故、助けた？」

彼が振り返り、私と目を合わす．．．．．これまた美形君だね。

彼は金の髪に碧い目、白すぎない肌色。

魔王には劣るが整った顔立ち。

腰には剣。

この容姿だと．．．．．

「勇者かい？少年。」

・
彼はわずかに目を見開き、頷いた。

顔に似合わず正直そうだね、ていうか精神年齢低そう。

若干失礼な事を考えつつ、勇者を見やる。

「少年って呼ばれるほど子供じゃねえ！それとアンタは誰だ、胡散臭そうな奴だな！」

「ワタシかい？ワタシはヤミイロと呼ばれているよ？」

胡散臭そうって・・・まあこの格好じゃ仕方ないけど、城の関係者でもないのにうるついていたキミの方がよっぽど胡散臭いと思うよ。

て、いうかムキになって言い返してきたよこの勇者。

やっぱり子供っぽいね、少年と呼ぶこと決定。

浮かしていた体を地につきし、自分よりも高い身長 of 勇者を見上げた。

碧く澄んだ瞳と合う。

「キミは、こんな場所で一体何をしていたのかな？」

動揺するかと思ったが、勇者は真っ直ぐな視線のまま答えを返した。

「魔王がどんな奴なのか見に来た。」

・・・あ、そうなの。

見に来ただけですかそうですか、ここまで来た事に感心をしていたのに一気に呆れにいつちゃったよ。

あれだよ、きっと弱点探りに来たとかどれくらい強いのかとか・・・を、見に、来た、ん、だよ・・・

「お前、今回のゲームがどういうものか知っているか？」
全く。

「まあ、いい。異世界からの訪問者を、もう魔王が認知しているかどうか聞きに来たというのもある。」

ドキリ・・・と、ワタシの心臓が鳴った。

動揺を悟られてはいないだろうか・・・。

チラリと勇者を見やるが、そのような気配はない。

「そうか・・・ワタシが案内してあげようか？」

そう提案すると、怪訝そうに眉を寄せた。

「もっいいい。胡散臭い奴について行きたくはないし、もう逃げ続けるのも限界らしいから帰る。」

懸命な判断だね、どうやら頭は悪くはないらしい。

問題なのは性格だね。

「そうかい、気をつけて行きなよ？またね、少年勇者君。」

勇者が出て行こうとした時ひらひらと手を振り見送る、最後まで
『少年じゃねえ！！』なんて叫んでいた。

また騒がしくなるが、すぐに勇者と同じ方向に音が消えていく。

おそらく、捕まる事はないだろうと思う。

一応勇者だし、ちょっとしたお呪いをかけておいたからね。

ほっと息をついた。

すぐ傍の人物にも気付かずに。

「気に入った？」

綺麗な低音が、耳元で囁かれた。

・（後書き）

勇者がやっと登場！！精神年齢低い設定だけど！

・（前書き）

すみません！また色々あつて一日遅れました！！（><；）

「ッ……！！？」

吃驚した、冷や汗が背中を伝うのがわかる。

「まあね、面白い人物だとは思うけどね……一体いつからいたのかな？魔王。」

魔王だった。

ワタシをすぐ後ろから抱き込むかたちになっているが、一体いつからいたのか。

いつのまにか、フードは外されていた。

「勇者がこの部屋から出て行っただくらいだよ、ヤミイロ。」

微笑み言う魔王だが、目が笑ってない……あれ？怒ってる？

て、というか首が痛いよこの体勢。

魔王はワタシより身長が高いし、後ろにいたので後ろを仰ぎ見る感じで魔王と目を合わせているので正直キツイ。

「あの、魔王？離してくれると嬉しいのだけど。」

そう言つと、魔王はにっこりと笑い（やっぱり目は笑ってない。）口を開いた。

「イヤだ。」

何故……！！？

え、ワタシ何かしたっ……ね。敵である勇者と話していたからか？

「怒ってる？何で？」

ダメ元で一応聞いてみた。

「何でだろうね？」

いや、問いに問いで返されても……え、何やっぱりワタシが悪いか？

色々考えていたら、魔王に呼ばれた。

「ねえ？ヤミイロ。」

思考の渦から上がり現実に戻ると、無表情の魔王。

「彼は僕の敵なんだ、なにが言いたいかは解るよね？一応警告は、しておくよ？ヤミイロ。」

つまり余計な手出しはするなって事だね、よくわかっているよ。解っているってだけで手出ししないわけじゃないのだけど、ね。

「解っているよ・・・彼は君たちの敵なんだからね。」

キマグレ?!

とりあえず、謎が残るばかりだね。

勇者が帰ったあと何か魔王は機嫌悪いし、本人怒ってないとか言っていたけれどもあれは絶対怒っていた。

だって目が笑ってなかったしね、何か殺気っぽいので振りまいていたしね。

(.....あれは怖かった。)

忠告した魔王の無表情、その瞳には何も映っていないように感じたから。

最近魔王が解らない.....イヤ別に解らなくてもいいと思うのだけだね？

何かワタシが魔王の事知りたいみたいじゃん！嫌だね別にそういうわけじゃないのだよ違う違うワタシは潔白だ。

うん、何コレ。

最近可らしいぞワタシ、何百面相一人でやってんだろ.....

「どうしたの？ヤミイロ。」

「ひあっ！っていきなり何するんだ!!」

いきなりにも程があるし耳元で喋るんじゃない！二重で吃驚してしまった。

振り返ると、魔王がクスクスと面白そうに笑っている。

「そんなに驚かなくてもいいでしょ。悲鳴可愛かったよ？」

褒めている？褒めているのか？嬉しくねえ.....!!

素が.....じゃなくて言葉がつい乱暴になってしまったじゃないか。

「まあいいけど・・・何か用かい？」

いつまでも取り乱しているのも何か気に食わないし、何か顔会わせづらかったりそんなことはなかったりするだろうけど！

「ん？僕より君の方が用あるんじゃない？」

「・・・」

何だコイツは。

さっきから気に食わない事ばかりな気がする、気じゃなくて確かにそんなこと言っている。

天然か、確信犯か・・・この魔王の事だからきつと後者だろう。いつもと変わらないあどけない笑顔を浮かべているが、それが若干黒く見えるのは気のせいではないだろうな。

「『異世界からの訪問者』聞きたいんでしょ？」

魔王が目を細める・・・つい動揺しそうになるが、なんとか踏みとどまる。

「どうして、そう思ったのかな？」

これは率直な疑問。

まさか心が読めたとかだったら恐ろしすぎる。

「だって、勇者の言葉にあからさまに動揺してたよ？ヤミイロ。それに君が興味を持ったから勇者を僕の所に案内しようとしたんじゃないの？それとも興味をもったのは彼自身？」

・

そういえば、勇者との会話を聞かれていたのだった。
うっかりどころではなく忘れていた。

勇者には気付かれていなかったのだけど、彼は結構鈍感なところがあるっぽいから。

そして最後の質問の意図が解らないのだけど？妙に声低かったしね。

「動揺した事にはよく気がついたね、魔王。けれど勇者に興味があるかないかは関係ないよね。」

「そう？そうかもね。僕はもの凄く気になるけどね。」
何でだよ。

あえて問わないのはその方が無難だと思ったからだ。

「異世界からの訪問者っていうのは・・・まあ、意味的に言えばそのままだね。」

「それとゲームと、どう関係があるのかな？」

率直な疑問を投げかければ、クスリと意味ありげな笑みになる。
勿体ぶるようなその態度に、若干イラッときた。

「ここだね？ヤミイロ。僕の質問に答えてくれない？」

ヒヤリ・・・と、魔王の視線が冷気を感じるほどの鋭さを帯びる。
嘘は言わせない、そんな声が聞こえてくるような・・・目は口ほどにものを言う、よく言ったものだな。

心底、そう思う。

「君は、何処から来たの？」

わざわざ二つに区切って聞いてくれちゃいましたね。
しまった、ふざけている場合じゃないね。コレ。

「東の端にある、セリアナっていう小さな国だよ。もつないけれ

ど・・・ね？」「

「・・・」

ど、どうしよう何か怖い魔王。

いやでも本当にある国だったし、この世界の歴史書に書いてあったし。

ちゃんと調べているのだよ！この世界に関していつ聞かれてもいように。

「そう。」

ニツコリと擬音でも付きそうな完璧な『作り笑い』を浮かべた。

「ッい・・・!？」

「シャノンさ、もう少しマシな嘘ついたら？」

一瞬何が起こったのかわからなかった。

背中に強い衝撃、押え付けられた肩、すぐ近くにある魔王の顔。気がついたら、壁に押し付けられていた。

薄い冷笑、目が笑ってないよ魔王。

「何の、事かな・・・？」

衝撃の余韻があつて、じゃっかん言葉を発しにくい。

「いい加減にしてね？今、凄く機嫌悪いから。」

魔王が首を小さく傾げると、サラリと銀の髪が揺れた。

クソ、サラサラキューティクルが羨ましい・・・!

なんて場違いな事を考えていても、頭の中では本格的に警鐘が鳴っている。

嫌な汗が背を伝って気持ちが悪い。

「・・・キミはもう、分っているのだろう？」

じゃなきゃ、何の根拠もなしにこんな暴挙には出ないと思う。

「気付いてたの？」

「なんお根拠もなしに、今みたいな状況にはなりえないと思うよ？」

微笑んだつもりだけど、今絶対笑顔引き攣ってる。

それよりも離してほしい、痛いです。

「そうだね。でも、それわかってて嘘ついたんだよね？」

今ギシッて肩が鳴った!痛い、物凄く痛い、冗談抜きで砕ける!!
「ッ・・・」

その痛みに思わず顔を歪めると、魔王の目に恍惚とした光が宿る。性格が歪んでいるのは知っていたが、ここまでだとは思ってなかった。

人の苦痛に歪む顔見て、恍惚とするだなんて趣味が悪いにも程があるだろう。

いつもなら『ああ、コイツやつぱり魔王なんだなあ・・・』とかしみじみ思うのだろうけど！今はそんな余裕一切ない。

「このゲームに勝つ条件に関わっているんだよ。」

「？どうゆう・・・」

『異世界からの訪問者』が？

微笑も、恍惚とした光も消え失せ、ずっと目が細められた。

（紅い色って暖色のはずだね・・・？）

そう疑問に思うくらい、魔王の深紅の瞳は冷めている。

「本当に何も知らないんだね、『異世界からの訪問者』さん？」

改めて言われると、何か・・・認めがたいな。

そっという思いと、今の魔王の瞳を見たくないという思いから、顔を伏せた。

「とりあえず、嘘つきにはお仕置きしてあげないかね？」

は？

・（後書き）

とりあえずでお仕置きなんですね・・・

キマグレ?!

シャラント

軽い金属の音がしたと思ったら、ワタシの首にかけられた銀の首飾り。

つて、えええええ!?!何コレ!何コレ!?!?

突然の事に焦るワタシを他所に、魔王は笑顔だ。

顎を掴まれ目を合わせられる。

今のもけっこう痛かった、さっきから乱暴だなオイ。

「その首飾り、僕のお手製ね。魔力を一時的に封じるんだよ? 凄いでしょ。」

血の気が失せる音が、聞こえた気がする・・・勿論自分の。

「そ、そうか・・・で? いい加減離してくれると嬉しいのだけど?」

本当に本当に本当に、離してほしい。

このままだとヤバイ、何がどうヤバイかと問われるとよくわからないけれどとりあえずは魔王の瞳がヤバイ。笑ってるけど瞳が笑ってないって!

え、何この人(人じゃないけど!!)何考えているの本当謎。

「シャノン?」

何故急に名前呼び!?

アレ? 確か前にも一回呼ばれたよね、なんだっけその時もしかところではなく嫌なめにあっただけだと思うのだけど? ワタシの気のせいかな?

ああ、そういえばあの日色々あったな・・・ちよつと遠い目をしてみる。

軽く現実逃避をはじめたワタシに気が付いたのか、魔王が更に顔

を近付けて甘く囁くように言った。

「ねえ？シャノン？僕がこんなに近くににいるのに、違うこと考えてない？」

「うっ……」

思わず苦悶の声が出てしまつて、ハツとした。

ワタシの馬鹿！！

何『うっ……』って！何なんだ？何なんだ！ワタシの馬鹿、肯定するようなものじゃないかああ！！！！

・
「駄目だね、シャノン？」

そう言って、ワタシの首筋に顔を埋めて舌を這わした。
ゾワリ。と、悪寒が走る。

吹っ飛ばしてやりたいところだけど今は魔法が使えない、試してみたが何も出来なかった。

ああ、今魔法の便利さを本当に実感しました。

「すまなかった。謝るから今すぐ離してくれないか？」

一応謝りはしたが、一体どこからがワタシの非なんだ？よくわからないワタシは愚かなのか？そのような事はないと思うのだけど・
・アレ？

「ねえ？魔王。ワタシ何か悪い事したっけ？」

「嘘ついたでしょ？」

「ワタシにも事情が「どんな？ないでしょ、そんなの。」

おいしい！！今断言しやがったこの魔王！おかしいだろ説明もさせてくんの？！決め付けはいけないだろ、決め付けは！！！！

「じゃあ何？一応聞いてあげる。」

「隠していた方が面白そうだろ？」

そう答えるワタシもワタシだけだね・・耳元で喋るのやめてくれないかな吐息がかかってる！

「そんなの事情に入らないよ。」

いやキミワタシの立場なら間違いなく同じ考えだったよね。

あ、魔王ならこんな状況には陥らないか・・・

「フフッ、ワタシにとってはとても大事な事だよ？」

この際笑顔が引き攣っているのはご愛嬌。

負けるなワタシ！

「どうでもいいけどね。」

弁解の余地もなしですか・・・

至極どうでもいように、魔王は言う。

と、いうか一切抵抗できないのが悔しい。

男女の力の差か、もしくは彼が吸血鬼なせいなのか、どちらか定かではないが押え付けられた肩はピクリとも動かせないでいた。

片腕は自由（顎を掴まれているから左肩は無事）なので魔王にせめてもの抵抗で彼を押し返そうとしたら、苛立たしげに舌打ちし邪魔だとも言つようにワタシの腕を上で一つにまとめられた。

今度はどちらの腕も使えない・・・アレ？状況悪化してない？

「あ、の・・・何するのかな、血を吸うの？」

「こんな体勢で？そんなわけないでしょ。」

・（後書き）

魔王は一人称僕だけど俺様です（- - ;'）

•
どんな体勢そしてどんなわけだよ。

あの、その獲物を前にした捕食者みたいな目やめてくださいお願いします。マジ怖いです。

顎を掴んでいた手をが、下へ下へとワタシの首の線をなぞっていく。

「ッ・・・何を・・・」

「何しようとしてるか、わからない？」

妙な含みの感じられる物言いだ。

シュツと音がした、何の音かといえばロープの紐。

ロープはバサリと床へ落ちて、下に着ていた制服が露わになる。

制服を見て、魔王は笑んだ。

「脱がしやすそうな服でよかった。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・よくない！！！！」

あまりの衝撃に何を言ったのかすぐには理解できなかった。

何、脱がすの？何で？別に見て楽しいものじゃないよ！！？

「シャノン・・・」

言いつつボタンを外すな！

ああああああどうする？どうするワタシ！！絶体絶命だし！
魔法使えないし！

『シャノン』

ふと、いつかしら聞いた声に呼ばれる。

プツリ・・・と、ワタシの意識が無理矢理切られた。

「久しぶりだな、シャノン。」

「よし、とりあえず一発殴られようか。糞神。」
とりあえず殴っておいた。

問答無用とか酷くないですか、とか言わない。

だって目の前にいたのはセス、あの諸悪の権化のセス！当然だとは思わないかい？

「わるかったって！謝ったろ！？」

「一体いつ？どこで？何時何分何十秒？地球が何回周った時？」
小学生か。

冷静な自分がつつこむけどこの際無視だ。

「まあいいけれどね。セス様？ワタシに関するあの世界での役目、
教えて頂けますね？」

敬語なのは相手が神だからではない、当然厭味だ。

キマゲレ?!

崩れ落ちる彼女の腰に腕をまわして支えた。

「シャノン？」

突然気を失った彼女に呼びかけるが、当然返事はない。

彼女がこの程度のことですぐに気を失うような柔な精神力ではないことくらいわかっている。

「……世界神か。」

精神を無理矢理引き剥がして連れて行けるモノなど限られている。本当に、忌々しい……

世界神は知っているだろうか、自分が殺してしまいたいくらい憎まれている事を。

知らないだろうな、世界神はいつもどこかしら抜けているから。今だって、そうだ。

彼女の体をここに残していくことが、危険なことだということもわかっていない。

馬鹿だね、セス……あんたは、全知全能などではない。

だって僕から彼女を護る事すら出来ない。

ふと、彼女を見やる。

痺れそうな程の甘美な香りに、意識のない彼女……本当に、無防備。

異世界の人間は皆こんなのか、それともシャノンが特別なのか。どちらにしても、失敗したね、セス。

シャツのボタンをいくつか外して、胸元を肌蹴させる。

そこに口付けて赤い花を散らせた。

それからいつもはしないような深いキスも、息が切れるくらいした。

けど、まだ足りない。

「ハハッ……」

本当、嗤える。

いくら異界の人間だからといって、たかが人間にここまで入れ込むなんて……

今すぐにでも彼女の血を喰りたい、彼女を犯してしまいたい、けど、まだダメだ。

それに、僕はシャノンを手放す気はないからね。

このままだと本当に理性がきかなくなりそうだから、ベッドに寝かせて退散しようと思った。

『気を付けてね？ シャノン』

君が僕を狂わすんだから……

キマゲレ?! (後書き)

リオ視点・・・リオ思考がちょっとアブナイヨ!!
思いつつも書きやすかった、どうしよう自分。

ちなみにリオはヤンデレじゃありません。たぶん・・・

キマゲレ？！

「な、何か寒気が・・・！」

あ、今ワタシ何か壊した？そんな気が・・・まあいいや。
とりあえず、説明はしてもらったから。

「人王と魔王の勝敗を決める道具って、わけだね。ワタシは。」
そう言つと、セスは眉を顰めた。

「道具とは「そんなとこだろっ？怒りはしないよ、そう言われても。」

言い募ろつとするセスを遮つて言つ。
怒ってはいない、だが不服ではある。

「異世界というのを楽しんではいるからね、それで？ワタシは帰れるのだよね？」

デメリットもあればメリットもある、だから納得はしているつもりだ。

ただそれは期間限定。

「帰れる。だが、勝者がお前を望めば帰れない。」

「それはない絶対ないあり得ない。」

即答でノンブレスなのは嫌な予感が過ぎったからだ！

大丈夫、誰もワタシを望まないから！！

言っていて悲しくないこともないが、そこで望まれてしまえばワタシは元の世界には帰れないじゃないか。

向こうには家族も友達もいる、みんな大切な人たちだ。
それらを全て捨ててでもこちらにいたいとは思わない、こちらに

はそこまで大切なものはないからだ。

「そうか、まあいい。もう戻れ。」

「は？」

ちよつ、え、何マジで?!あの状況に?!!

「とりあえず、達者でな・・・」

フザケンナー!!!

・

「おはよう。」

デジャブ？

前にもこんなことあったよね。

魔王はベッドに腰掛けてワタシの髪を梳いているという・・・

ただ今回は、目が笑っていません。

「おはよう魔王。」

起き上がり、違和感。

アレ？胸元が若干涼しい気がする、アハハッ何でかな？気のせい？

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何をしたのかな？」

搾り出した言葉がその一言。

ボタンが四つ外されて肌蹴ているうえに赤いアトがあるように見えるのだけど気のせい？気のせいだよな？！

「ん？我慢できなくて付けちゃった。」

エヘッとても付け加えそうだ。

「ついでにこっちもね？」

「・・・・・・・・と指を這わせたのは腿、しかも内側。」

そこをみると赤いアト・・・・・・・・ねえ冗談？冗談だよな！？え、

だってここキミなんていうか知ってる？絶対領域っていうのだよ！

！キスマークって口付けてつけるものだよな！？

何かどうでもいい方向に思考が流されたぞ今。

「混乱してるねえ。」

魔王面白そうにクスクス笑っているけどワタシ全然楽しくない！！

「ねえ、シャノン・・・・」

呼ばれたので、視線を合わせた。

呼ばれたので、視線を合わせた。

「このまま続けてもいい？」

「駄目に決まってるだろう！！」

馬 鹿 か お前は！

何今日なんでこんな頭湧いてるの！？魔王おかしいよ（おもに頭が）ワタシなんかを相手に欲情するな！！

本気で怒鳴ったにも関わらず、魔王は楽しそうに笑った。

「…………ワタシみたいな子どもに、心臓に悪い冗談はやめてくれないか。」

そんな魔王を見て冗談だと思ったのでそう言った、深く深くため息を吐きながら。

冗談にしては、少々どころではなく過激な気がしないでもないが・
・そこは譲歩しようじゃないか。

・

「子ども？シャノン幾つ？」

「十八・・・」

「ふうん、じゃあもう大人だよ？ここでは十七で成人だからね。僕ももう五年は前に成人。」

「は？」

五年つてことは今、二十二？

「はあ！？四つも年上！？まだ十代かと思っていたよ?!」

や、二十代に見えなくもないけど！いつもニコニコしていてその笑顔が人懐っこくて若干幼く見えさせていたのかな！？

「うん、そう。年上の人は敬おうね？」

人差し指をワタシに押し当てて言った、このアクションはいらないんじゃないか？

「・・・シャノンの唇つて、柔らかくて甘いよね。」

「意味わからないよ?!」

敬う気にもなれんわ!!おかしな発言はよそうか！

「魔王・・・本当に大丈夫かい？」

本当に、本当に大丈夫ではない気がしてならない。

「そう？いたって冷静だね。」

ニコリと笑つて、ワタシをベッドに押し返した・・・いや、押し倒したの方が正しい。

「ちよっ、魔王!？」

腕は押え付けられている。魔法で・・・・・・・・・・・・・・・・
しまったああああ!!

封じられてるのすっかり忘れていたあ!!

「有言実行しようかと思つて、ね？」

え、何ソレそんなの言つたっけ？

すこし前を思い返してみる……

『このまま続けてもいい？』

アレか！

やっぱりキミ今日おかしいよ何か変なものでも食べたんじゃないのかな？！

若干失礼な気もしないでもない葛藤を心の中で繰り広げていた。

押し倒した体勢でジッとワタシを見ていた魔王が、胸の谷間に顔をうずめてきた。

・

ああああ、やあめえろおお・・・変な声が出そうになるのをぎりぎりですぐに押さえ込んだ。

ふと魔王が、顔を上げて耳元に唇を近付ける。

「ねえ？シャノン？」

かなり甘さを含んだ低音の美声で、囁かれた。

「名前、呼んで？」

誰の・・・当然魔王のだろう。

でもどうしてだろう物凄く今この状況では呼んじゃいけない気がするのだけど・・・

「シャノン？」

「ひゃっ・・・！」

色々考えていたら、耳を甘噛みされた。

頑張っただけで押さえていたのにもかかわらずやはり変な声が出てしまった。

というか今のは呼ばなかったからか？！

いつまでも呼ばないのがいけないのか、魔王はワタシの耳を弄り始めた・・・口に含んだり、舐めたりして。

ううう、どうしようやバイイ・・・もう勘弁本当に。

「ッ・・・リ、オ。」

呼んじやった、負け（？）を認めちゃったよ。

って、言うかなに今の声！微妙に変に甘さを含む声だったよ！？魔王はピクリと反応して、顔を上げてワタシを感情の読み取れない表情で見下ろす。

「リオ・・・？」

無表情が無駄に恐ろしいよ？

ふとその瞳が揺らいだと思ったら、次の瞬間には口付けられてい

た。

やはりすぐには頭が追いつかない、もう三度目だというのに我が事ながら間抜けた。

そう、三度目。

けれど今回はどこか違う、なんというか・・・噛み付くような、とでもいうべきか。

彼の舌がワタシの唇をなぞったと思えば、ソレはそのまま唇を割って押し入ってきた。

「んっ・・・！」

押し返そうとするが、逆に絡め取られる。

上あごを優しく撫でられ、舌を吸われ、ゾクゾクと変な感じがする。

角度を変えるために少し離れては、またすぐに口付ける。

名残惜しげに魔王がワタシから離れやっとな開放された。

酸欠か、それともその行為に酔ったのか、前者であってほしいとは思うがワタシの頭は霞がかかったようだ。

なにも、考えられない・・・

ぼうと魔王を見ていると、視線の先で彼は薄く笑った。

「・・・・・・・・」

「え？」

聞き取れなかったが、彼は確かに何かを言った。

再び彼が顔を近付けてきたとき、金属の類が砕けるような音が響く。

その音によつて、現実を引き戻される。

「あーあ、時間切れ。残念だね？ヤミイロ、ぎりぎりセーフ？」

「ワタシにとっては完全にアウトだったよ？」

お前にとつてのアウトはなんなんだよ！

「よかったね。処女は奪われなかったよ？」

「・・・・・・下ネタは止めて頂きたいのだが？！」

なに、よかった本当に！

「好きでもない人に奪われる気は無いよ。」

「そう。」

若干不服そうなのは気のせい、無視だ無視。

とにかく、この状況をどうにかしたい。

「さつさと退きやがれ、リオ。」

あー・・・・・・もういいや、今日疲れたし。

リオが口調変わったことに面白そうに目を細めたのも気に喰わねえし。

「無理矢理退かせば？」

「今力加減できねえぞ？」

「怒ってる？」

「疲れたただけだ。」

「そ。」

そう、ワタシは疲れると何故か口調が荒くなる。

元いた世界でもそうだったので、よく『怒ってる？』とよく言われた覚えがあった。

別に怒っているわけではない、ただ紳士精神なんてどうでもよくなるだけであって怒ってはいない。

とりあえずは魔王が退いてくれたので起き上がって距離を一応とる。

「じゃあ、お・・・ワタシはもう行く、リナ嬢とお茶会する約束をしていたからな。」

なんとか一人称だけは踏みとどまった、若干言ってしまったけれども！！

ちなみにリナ嬢はこの間知り合ったとある貴族のお嬢様。

物凄く美人でいい人でワタシに妙に親切なんだよ、このあいだなんかお揃いの腕輪くれたんだよ？田舎者という事で放っておけないのだろうね。（自己解決）

「待つて。」

「あ？」

しまった昔のくせで！！

今でこそ穏やかな聞き返したが昔は『あ？』か『あゝあ？』だった。

「あのね？明日がゲームの開始する日なんだよ。」

「・・・明日？随分と唐突だな。」

聞いてないよ？そんな事。

「明日、僕らと勇者達は戦うよ？ヤミイロはどうするの？」

まあ、言いたいのはそのことだったらしい・・・しかし、ねえ？

「どう・・・って？」

決めてねえよそんな重大なことは！まず知らなかったしな！！でも、相手のこととか全く知らないんだよねえワタシ。

「前にも言つたように、相手方を見てから決めるよ。」
「そういえば前にもそんなこと言ってたね。」
うん、ワタシも今思い出した。

・（後書き）

今回短！！

そして只今『月露輝く夜』でキャラアンケート実施中です！迷惑でなければ暇な時にでも投票よろしくお願いします！！

キマゲレ?!

「だれ？」

「え？やですねー。僕ですよ？」

フード付きの टीーシャツ にズボン というラフな格好、髪も下ろして いて今は腰くらいまでである。

というリシエラ嬢。

「印象変わるね・・・」

普通にかつこいいいよ君、いつもそんななんらしいのに・・・まぎらわしいから！

「これは戦闘するときだけですからね、さすがにアレは動きづらいですよ。」

そりゃあ・・・そうかもね。

「おい、リシエラ。コイツも連れて行くのか？」

「そうらしいですよ？」

ワタシを指差しながら言うのはメガネ君。

あ、今舌打ちしたね！？

「文句でもあるの？」

ああ・・・まさに魔王。

黒いマントに、まあ中はいつも通り白シャツに黒いズボンだけれども。

マントあるだけで大分違うよ、うん。その方がらしい。

「いえ、何もありません。」

メガネ君は反発できないのかしないのか、どちらにしろ黙ってくれて嬉しいよ。

「じゃあ、行こうか。」

微笑んで、この場にいる全員に言う。

ワタシ、リシエラ嬢、メガネ君、あと新しく知り合った蒼い髪の騎士団長。

彼がスイと手を動かすと、場面は一瞬で切り替わった。

おそらくは、森の中の明け地。

周りには木々が鬱蒼と生い茂り、半径一キロくらいの円方に切り開かれていた。

向かい側を見ると、いつぞやの勇者。

キマゲレ?! (後書き)

そろそろ追いついてきたんで更新遅めになるかもしれません・・・

「……一人？」

そう、勇者は一人でそこにいた。

「人間の王は随分と頭の螺子が緩んでいるんだね。」

ククツと、低く魔王が笑った。

随分な言い様だな……。いやちよつと待て、今何か重要な語句があつた気がするぞ。

「王？」

聞き返すと、愉快そうにその端正な顔を歪ませている魔王と目が合う。

「そう、アレが人王ね。まだ随分と若いけど、しっかり政はやっているらしいよ？勇者の役は自分から名乗り出たんだって。かわつてるよね、僕なら王族じゃなきゃこんくだらないゲームでないのに。」

若干皮肉気味に言い放つ魔王。

ところで、いつゲームとやらは始まるのかな？

「まだ、神の使いとやらは来んのか？」

騎士団長がポツリと言った。

気になるので聞いてみようか。

「何だい？それは……」

「それも知らないんだ？」

おい、今ワタシは騎士団長と話しているのだけど？何故魔王が返答する。

「騎士だ「ゲームの進行係みたいなものだよ、ヤミイロ。」

今度はリシェラが答えた、しかも言葉を遮つて。

え、何故君たち兄弟はワタシと彼を喋らせないのかな？嫌がらせ？
「そ、そうか。ありがとうリシェラ嬢。」

今彼に嬢をつけて呼ぶかどうか迷ったがとりあえずはつけておいた、そして一応礼は言っておく。

騎士団長を見ると、可哀相なものを見るような目でワタシを見ていた。

え、何故？

「とりあえず、頑張れよ・・・」

騎士団長は苦笑しながら、ワタシの肩にポンッと手を置いた。すぐに離れたが。

・（後書き）

勇者馬鹿そうで実は王様でしたー。

•
何か近所のお兄さんみたいだ、美形だけど常識人っぽい・・・地味に感動して彼に若干熱い視線を送っていたら、寒気がした。

「ヤミイロ？」

肩をつかまれ引き寄せられた。

何故かサアツと血の気が引く、何も悪いことはしていないのにも関わらず。

「な、何かな？」

恐る恐る、（振り向きたくは無いが！！）振り向く。

愛想笑いも引き攣るのは仕方が無いと思う！だって相手は魔王だもん！

「ソウが気に入った？」

ソウとは騎士団長のことだろう、彼を顎で指しながら言ったから。微笑んでいらっしゃるけど目が笑っていませんよ？ワアコワイ・

・

「兄があんな感じだったらなと思ったただだよ。」

『ふうん・・・』と、自分から聞いたくせにそれだけしか返さなかった。

何なんだ、まったく。

「ココロが狭いねえ、魔王は。」

突然目の前に現れた、白い髪にほぼ白の青い瞳の少年。

ココロと笑って言うが相手が相手だ、考える。

そして離れる鬱陶しい！

彼はワタシの脇の下から腕を巻きつけて抱きついていて、ついでに上目遣いでこちらを見上げてきた。

ワタシの肩辺りまでしか身長のない彼、胸があたっているが相手

は子どもだ気にするな。

「ね？そう思うでしょ？」

「ここで頷くと魔王が怖くて仕方がないのですが？」

「あ、俺はアヤナだよ。よろしくね？」

ワタシだけによろしくしなくてもいいんじゃないのか？

「フフツ、少年？離れてくれ。」

「ヤ、だってお姉さん柔らかくて気持ちいい。」

ピシッと、辺りが凍ったのはワタシの気のせい？気のせいだよー！

そしてセクハラ！？イヤ待て相手は子どもだ、セクハラには入らない！（はず）

そして上目遣いが最強に可愛いから許せる！！それもどうかと思うが無視する！

「離れてね？アヤナ。」

おおっ魔王！これは助けというべきかな！？キミ今半端なく怖いよ？主に瞳が怖いよ？！

「ヤツ……」

いちいち可愛いなこのコ。

「魔王、別にいいだろう？子どもなのだし……！」

……言い返して本当すみませんでした！！謝るからそんな氷のように冷たい視線を向けなくてくれ……！！

冷や汗が止まらないワタシから魔王はアヤナを引き剥がして、ワタシを抱き寄せた。

え、ナニ？頭がついていかないよさつきから！

「嫉妬なんて大人気ないね、リオ様？」

「うるさいよ？大人だって嫉妬くらいするの、知らなかった？」
そんな二人の会話は幸か不幸ワタシには聞こえなかった。

「で？君が神の使いであつてる？」

ワタシを抱き締めたまま確認に移るな馬鹿魔王、肩に頭を乗せるな重い！

「うん、そうだよ？ねえ、そろそろ離してあげたら？」

「イヤだ。」

語尾に音符がつきそうな言い方だった今。

肩に頭を乗せるのを止めたと思ったら、更に腕に力を込めて体を密着させた。

く、苦しい・・・恥ずかしいとか以前に苦しいよ魔王！

訴える気持ちで魔王を見上げたら、ニッコリ微笑まれた。

「ま、魔王？離してくれないかな？」

「で？」

「は？」

なにが、『で？』なの魔王意味不明だからねキミ。

「どう？ヤミイロ。どっちにつくの？」

「重大な返答を急かすな！」

勇者一目しか見てないよね！？さっきからなに嫌がらせ？！

確かに相手を見てからとは言ったけどそれは相手の事を色々知つてからという意味も含めているからね！？

しかも相手はまだ勇者しか見ていないし、まさかアレ一人じゃないよね。

「今日はね？代表者が戦うから基本来るのは一人だけでいいんだよ。」

ワタシの心情を察してくれたのか、アヤナが説明してくれた。

ちなみに魔王の腕の中からは自力で抜け出しました・・・

とりあえず！これはチャンス（？）じゃないか！！

「魔王「いいよ？」まだ何も言っていないよ！？」

ナニこのコエスパー！？怖すぎるよ君！

「ヤミイロのことだから勇者と戦って実力みたいとか言うんでしょ？わかるよ、それくらい。」

『いつてらつしやい』と、ヒラヒラとワタシに手を振った。

まあ、いいっていうのならねえ。

みんなに見送られて（めがね君には睨まれた）、明け地の真ん中に向かった。

勇者もそこにいて、彼を見上げる。

「お前か・・・やはり魔王の味方か？」

若干眉間にしわを寄せながら言う勇者に、微笑みながら返してやった。

「それはね？キミ次第だよ、少年勇者君。」

キマゲレ?!

不敵に笑って、そう言いはなつワタシに勇者は怪訝そうな目を向ける。

「どういう意味だ？」

「そのままの意味だよ？さあ、始めようか。」

アヤナを見やると、ニコリと微笑んで視線を返してくれた。

その笑顔には影がある、いや背後にどす黒い何かがある！……

ああ、魔王第二号（?）。

笑顔が引き攣るんですけど？

「いいよ？けど、殺しちゃダメ。それじゃ、はじめよ。」

スツと手を動かしたと思えば辺りに結界が張られる、被害を抑えるためだろうな。

視線を、勇者に戻す。

「そちらからどうぞ？」

そう言つと、勇者は腰の剣を抜いた。

「手加減は出来ないぞ？」

「されるほど弱くはないさ。」

フツと笑っておおげさに方をすくめて見せると、わかりやすく眉をしかめる勇者。

ワタシも一応武器を出しておこう、まあワタシの場合は刀だけど。昔剣道をかじっていたし、この方が力もあり使わずに切れるからいい。

「おいで？」

刀を構えて言つと、彼は切りかかってくる。

それを二度三度刀で受け流し（腕力ないからうけとめられない。）
、体勢を崩したところを剣の柄で肩辺りに打撃を加えるがあまり効果は無いように見える。

すぐに体勢を整えると、彼は剣を地面に突き立てて何かを呟いた。すると地面が裂け、その合間から業火が噴出し竜の姿をかたどる。さすが勇者現人王、やる事が違うねスケールでかい……

「行け。」

勇者が言つと同時に炎がこちらに向かう、けどまあこの程度なら何とかできないわけでもない。

刀に冷気を纏わせ、横に薙ぐ。

竜はそこから崩れ消えた。

当然勇者の攻撃は止まないが性格が災いしているのか、どの攻撃も直球。

ど真ん中で、単調、単純すぎて笑える。

けれどまあ、強いことには変わらないが相手が悪いね。

（これじゃあ、魔王には勝てないね。残念。）

もうそろそろ決着をつけようか……

そう思い、勇者の目の前に一瞬で出た。

「！」

「残念だね、勇者……キミの負けだ。」

多分今勇者はワタシの動きが殆んど見えていなかっただろう、だって本気で驚いていたからね。

刀で腹部を貫かれてからだろう、気づいたのは。

「うつわ……すごく痛そうだね、勇者。」

これで痛くなかったら人間じゃねえよ……冷静な自分につつまれた。

だって思いのほかスッパリいつちゃったからね、貫通したよ。って、いうか止めないのかアヤナ。

キマゲレ?! (後書き)

戦闘終わるの早!! 描写に関してはノーコメントですよ・・・
そして武器は刀! 大好きですよ大鎌の次に好きです。

二刀か一刀かで迷いけつきよく一刀という・・・そして勇者が弱いわけではない、ヤミイロが強いんです。というか魔王パーティが強いだけ・・・

・

まあいいや、とりあえずどっちにつくべきか判断しないといけな
いからね。

これは、魔王にも聞いたこと・・・

「キミは・・・何のために、戦うのかな？」

ワタシはボロボロの少年勇者を見下ろしながら聞いた。

「護る・・・ため、だ・・・」

少年は顔を上げ、ワタシを睨みながら言う・・・その真っ直ぐな
目を見て、ワタシの好奇心がうずいた。

笑みを深くし、少年勇者に言う。

「気に入ったよ、少年。」

クルリと反転し、仲間でもないのに今まで一緒にいた人達に言っ
た。

「ワタシは勇者側につくよ・・・こちらの方が、退屈せずにす
みそうだからね？」

おどけるように言えば当然、抗議は言われる・・・頭の堅そうな
眼鏡に。

「なっ・・・貴様、裏切る気か！」

その言葉にワタシはクスリと冷笑する。

「裏切るもなにも、ワタシは貴方たちとお仲間になった覚えはな
いよ？」

挑発的なワタシの物言いに、あちら側のボスである魔王ことリオ
は愉快そうに笑った。

「いいよ？別に、僕はかまわないから。」

「さすがリオ。キミはわかっているね。」

クスクスと笑いながら、からかうように賞賛する。

「でもね？囁音・・・」

声が間近で聞こえ、振り返る。

驚いた・・・いつのまにか、リオがすぐ前まで来ていた。

「敵側に行くのなら、僕は君を奪うから・・・覚悟しておいてね・・・？」

いつもはしないような妖笑で、ワタシに言った・・・

「いつておいで？ 囁音・・・今日は見逃してあげるから。」

背を押され、彼のもとへ走りよりしゃがむ。

「おい、少年いきているかい？」

彼は今にも死にそうな怪我を負っている・・・ので、確認してあげた。

ワタシって優しいだろう？

「・・・テメエがこんな怪我負わせたんだろが・・・」

うん、そうだったね。

「はいはい大丈夫だよ、今治してあげるから・・・」

そう言い、ワタシは手を彼に向ける・・・白い光が彼を包み、怪我は全て治った。

「治療完了！ 君達の拠点はどこかな？ 少年、イメージしてくれればいけるよ？」

少年こと勇者に言う。

「お前は・・・こちら側につくのか？」

「随分とマセたしゃべり方するのだね、少年勇者君？」

「はぐらかすな。質問に答えろ、ヤミイロ。」

睨んでくる少年にワタシはわざとらしく肩を竦め、答える。

「はぐらかしている気は無いのだが・・・大丈夫、ワタシはもともあちら側についていたわけではないからね・・・面白そうな方につくつもりだったからいいんだよ。」

フードでみえないかもしれないが、一応困ったような表情を作っておいた。

「信用、出来るのか？」

あらかさまに疑ってくる少年に、ゆっくりと言った。

「あなた方が裏切らないかぎりは・・・ね。」

少年はフツと笑い、差し伸べたワタシの手をとった。

少年を立ち上げらせ、魔王組の方を振り返り、フードは外さずにニツコリと笑った。

「ワタシの名は、悲月嘸音・・・勇者側につくよ。」

・（後書き）

物語が動き出しました、うん、それはいいが・・・どうしよう!!
？終わっちゃった!!!（@ @:）
連載に追いついちゃうよ、というかも次更新したら完璧追いつく。
どうしよう・・・

キマゲレ?!

とここまで言っただけだった。

「アヤネ、もう今日はいいのかい？」

「ん？うん、いいよ。もう目的は達成したし、一応ね。」

ニコニコニコニコ・・・このさつきから笑顔しか浮かべていないね。

不信心よりも感心の方が勝るよ。

「じゃあ、帰ろうか。勇者？」

フラフラしているけど大丈夫だね、どくどく血を流していたせいでさうけど。

うん、傷は完璧に治したからワタシは何も悪くない！よし解決！！

「なるべく動かないほうがいいね、とつとと行こうか。」

こんなふうにはいるが一応気遣っているつもりだ。

少年の肩を支えて魔法を使う、最後に魔王を見た時に不吉な笑顔でこちらを見ていたのは気のせいだと思いたい。

ところ変わって切り替わった場面は人王城の王の、つまりは少年勇者の私室。

「はあ・・・」

「どうした？」

「イヤ、ナンデモナイヨ。」

別に目の前に女装しているっぽい変体そうな人がいるーなんて思っていないよ、きっと女装じゃないのだようんそう違うことを願おう。

「ああ・・・目の前にいる白髪は女装趣味の変態だから気を付ける。」

百歩譲って変態はよしだったかな。

「やあんっ酷いわー王様あ、変態だなんてあたし傷ついたわあ。」

全然傷ついたようには見えないが・・・白髪に明るい茶色の彼は見かけ和服美少女。

でもほら凹凸がさ、リシエラ嬢みたいによくわからない服きていたらいいけど、その服よくみたらわかつちゃうよ。

しかも高身長だし、美人で細く見えるけど多分勇者より身長高いし。

「まあいいけどお・・・このコ誰？」

抱き付かれたし。

「ッ！離れてくれないかな？お嬢さん。」

「きやあゝ『お嬢さん』だつてえ！それになにこのコすごく抱きごごちいいんですけど！」

離れてほしんですけど！そして勇者助けてくれてもいいんじゃないのかな？！

「巻き込まれたくないからな・・・」

ワタシの思いを汲み取った誰かが彼を引き剥がしながら、そう返してくれた。

「申し訳ございません、嗚音殿。伽羅の無礼をお許してください。」

^{ワタクシ}私は拘と申します、以後お見知りおきを。」

何かすごい人きたね。

艶やかな濃い紫の長髪を後ろの肩辺りで緩く束ねている、切れ長の瞳は同色で陰陽師みたいな人だ。（格好が）

美形な所を除けば常識通じそう、通じてほしいな！がちょっと疑問が。

「どうしてワタシの名を知っているのかな？」

「見ていましたから、当然ですよ。」

見ていたって、どうやって？というかいつから？そこはかたなく嫌な予感がするのは気のせいかな？

「私は王の補佐。彼を心配して、常に監視をするのはあたり前でしょう？」

過保護を通り越している気がするのはワタシだけ？というか常に

ということとは、勇者が魔王城に来た時も？

「それに私は少々人より五感が優れておりまして、ずっと見えていましたよ。」

そう言いながら近付いてきて、ワタシを抱き寄せた。

「そのヤミイロのローブに溶け込みそうな漆黒の髪がね・・・」

キマゲレ?! (後書き)

丁寧語の常識人のはずがああああ!!

いやー常識人がでてるのは一体いつでしょうねー・・・というか

ここでも女装男子。

ださないつもりだったので・・・

番外・ある日の昼下がり

「……魔王？」

昼下がり、丁度良い日差しに心地よい風。

外を……といっても城の庭だが。

散歩していたら、木の陰で眠る魔王をみつけた。

そんなにも心地よい場所で眠っているにも関わらず、魔王はうなされていた……

「魔王？大丈夫かい？」

彼の顔に汗で張り付いた髪を払いながら聞く。

「んっ……ヤミイロ……？」

魔王が目を開け、キレイな深紅の瞳と目が合う……フードで相手からは見えないだろうけど。

「うなされていたよ、大丈夫……！」

……驚いた。

急に抱き寄せられたから……

「魔……王？」

彼の体は妙に冷めている……おそらく、恐怖で。

「魔「僕の名はリオだよ……シャノン。」

声は、力なく震えていた。

見上げると、彼は苦しそうな、悲しそうな表情。

「リオ……悪夢を、見たのだね？」

「うん……怖い……とても怖い夢だよ。」

ギュッと、ワタシを抱く腕に力が入った……その腕も、わずかに震えていた。

抱き返し、なだめるように背を撫ぜる。

「大丈夫だよ、リオ。ここにその悪夢はないから……大丈夫。安心してね？」

そう言つと、だんだんと震えは止まっていた。

「シャノン・・・」

「何だい？」

「歌、うたつて？」

「ああ・・・いいよ？」

微笑んで、返事をする。

暫くうたっていたら、上から寝息が聞こえた・・・

（今だけは、いい夢を・・・）

番外・ある日の昼下がり（後書き）

そつえば主人公って、声だけは！（ここ強調）きれいな設定だった！

と思い出したりしなかったりしたりで（どっちだよ）書いてたと思います。

こっちでは番外をUPしていなかったなと・・・なんで明日も投稿します！

「！」

ワタシにしか聞こえないよう囁いた。

どれだけ視力優れているのか、フードを被って完璧に隠せるわけではないが色も色なので黒髪は色にまぎれて見えないはずだ。

「王、二人きりでお話したい事がございますので・・・よろしいですか？」

いつのまにか離れていた拘が勇者に言う。

「ああ・・・だがそいつは仲間だ、手荒なマネはするな。」

「わかっております。」

いやいや少年勇者よそこは断ってほしかったな、だってこの人のワタシに対する態度というか雰囲気が違うこと察せよ。

という心の中の葛藤は届かずに、ほとんど引きずられるかたちで部屋から退出させられた。

「昼間から女性を部屋に招き入れるのは初めてですね。」

しばらく廊下を歩いて階段を下ってついた部屋に入ったときに、彼が後ろ手で障子を閉めながらそう言った。（なんと人王城は和風！）

このときもれなくドン引きしたのは言うまでもないだろう。

「そんなに引かないでいただけますか？泣かせたくなるではありませんか。」

おかしいだろ！

駄目だこの人全然常識人なんかじゃない！どうしてワタシの周りには常識人がいないのかな！？

「いいですけどね、本題に入りましょうか。」

「さいですか・・・」

最近笑顔が引き攣ることが多い気がする、うんこれは気のせいじゃないよ絶対。

そしてこの人さつきからずつと無表情でニコリともしないね、それで近付かれるとかホラーだから！ホラーなみに怖いから！！魔王みたいに笑顔で近付かれても怖いけどさ！

「な、何で近付いてくるのかな？」

「別にいいでしょう。」

「イヤイヤイヤおかしいよ。」

微笑むところが違う！ここで？ここで微笑むの！？怖さ倍增！！
こういうとき、大抵ワタシは背後がお留守になる。

トンッ

『お約束』そんな言葉が頭をよぎった。

・（後書き）

背後に壁はお約束。 気のせいじゃありません！腹黒が獲物を逃すわけがない！

番外・鈍い彼女

「魔王は結婚しないのかい？」

「は？」

突然なにを言い出すのこのコ。

「イヤ、魔王の歳ならもう結婚していても可笑しくはないだろう？」

僕はまだ十八だけど・・・そうだね。

たしかに、王の婚姻は早い。

先代の人達も十代で結婚していたらしいし・・・

「僕が結婚していたらどうなの？」

気になったから聞いてみた。

「ん・・・そうだね、奥さんと友達になりたいね。」

「なんで？」

「キミのお嫁さんだからきつと可愛いコなのだろうなと思ってね

？ホラ、ワタシ可愛いコ大好きだから。」

・・・なんかイラッときた。

なんでヤミイロはこうも鈍感なのかな・・・他のコトの関しては鋭いのに・・・

今だって・・・ココは僕の自室。

呼んだのは僕だけど、鍵閉めたり近づいたりしてどうも思わないってどうなの？

「どうしたのかな？魔王・・・急に不機嫌になったね。」

ホラ、こういうコトは気付くのに肝心な部分だけは気付かない。

いつそのこと、奪ってしまえばいいとも思う・・・

けど、彼女には魔力の無効化がきかない。

それほど、彼女の魔力は強大だから・・・だからどんなに男女の力の差があっても、彼女を押さえ込むのは無理。

きつと、普通に闘って勝つのはヤミイロの方だ……まあ本気になれば勝つのは僕だけだね。

「ねえ、ヤミイロ……」

呼んで、彼女を引き寄せて……そのまま彼女に口付けた。深くしそうになるのを、ギリギリの理性で押し留める。

「ッ……キミは……なんで、いつもそう突然なんだ！」
顔を赤くして言うヤミイロ。

その反応が可愛くて、クスクスと笑ってしまう。

「これくらいで赤くなって、可愛い。」

言えば、更に顔を赤くさせる彼女……

ねえ、ヤミイロ？僕がどれだけ我慢しているか、知っている？

番外・鈍い彼女（後書き）

リオーーーーー！！思考がちよつとR・15だぞコノヤロウ！
と心の中で突っ込みながらもリオ視点が一番書きやすい・・・；
一応ヒーローがこれでいいのかと最近疑問に・・・！

・
なんでワタシの背後には必ず壁があるんだああああ！いやあたり前の事だけれども扉があってもいいじゃないか！！？

うわぁデジャブ、凄いデジャブを感じる！気のせい！？ワタシだけ！？

「もうお逃げにならないのですか？」

見りやわかるだろが、言いながら手を壁につくな困うな微笑むなあああ！！

しかも目が笑っていないよ？ハッハッハッ冷や汗が止まらないよワタシ。

「顔が近いよ？離れてくれないかな。」

「何故です？」

そう聞き返すキミがわからないよ！

「本題とは関係ないだろう？」

「そうですか？」

いや知らないよ！言っちゃってなんだけどキミが言ってる本題って知らないからね？！

それはいいから早く離れてくれ・・・！

「この、漆黒の髪・・・」

と言いながら、ワタシの髪を人房手にとる。

口付けて（うわぁ・・・）、こちらに視線を送り妖艶を浮かべた。

「闇色にまぎれる美しい濡れ烏の髪を、一度見て忘れる者はいないとおもいますが・・・」

過剰装飾にもほどがある！

さつきから何？この人なに？！ワタシはもう引きに引きまくっている。

「フフッ、その過剰な装飾語に鳥肌が立ちそうだからやめてくれないか？」

ホラホラ現に寒気がもよおされているよ。

「本当の事を言っているまでですがねえ・・・おや？瞳も黒いのですね。」

「はっ!？」

「いいいいいいの間に！」

いつのまにかフードが下げられていて、拘の目とばっちり合っていた。

「その黒曜石の瞳が涙に濡れたら、どんなに美しいでしょうね・・・」

「装飾語でうつかり聞き逃しそうになるがソレ、泣かせるって言っているよね？コワッ！」

顔近いよ、吐息かかてるよ、装飾語が過剰だよ誰か助ける!!

「嗚音ど」「いい加減にしる色ボケ補佐。」

拘の眉が大変不服そうに寄せられ、その肩越しに見れば少年勇者ありがとうさすが勇者で現人王、心の底から感謝するよ!

「まさかとは思ったがさっそくか・・・呆れを通り越して感心するぞお前。」

「早めに捕まえておかないと、逃げられてしまうでしょう?」

「そんな考えは燃えるゴミにでも出しとけ。」

取り付く島もない勇者に苦笑して拘はやっとワタシから離れた。

「それで?拘、お前がわざわざ私室に引き込んでまでコイツと話したかったわけは何だ?」

勇者ワタシの色とか気にしないんだね、というか忘れられてないよね?二人だけで話してるよ?

とりあえずもう見られたからといっていつまでもフードを下ろしっぱなしというのもなんなので被りなおしておいた。

「嗚音殿・・・」

「はい?」

急に話を振らないでくれないかな、地味に混乱するからね?

「貴女は『異世界からの訪問者で間違いないですよね?』」

この問いに、ワタシが更に混乱したのは言うまでもないだろう。

・（後書き）

勇者のおかげでR 15はまぬがれました！！そして早速ばれてます。

そしてとうとう追いついちゃったぜどうするよ・・・たぶん一週間に一度くらいのペースでいくと思います、投稿・・・！

えーと？とりあえずあてずっぽうで言ったわけじゃないよね、うん。

ごまかしてもすぐにはれるだろうし、正直に言うのが得策か・・・魔王の時のがあつてがちょっとトラウマ気味だしね。

「そーおい、行くぞ。」

遮ったのは勇者で、ワタシの手を取って部屋から連れ出した。

え？は？何勇者ワタシのせつかく決心したのにセリフを遮るってどういうことだい？

それとさっきから混乱しっぱなしでちよつと気に喰わない。

しばらく無言で歩いていたが、部屋から大分離れて立ち止まった。

「いいか？お前が『異世界からの訪問者』っていうのはなるべく伏せておけ。魔王のところはどうか知らんが、俺のまわりはわりと過激な奴らが多い・・・閉じ込められたくないや言わないことだ。」

・・・物騒だね、凄く。

え？何？もしかしくなくてもさっき結構危なかった？そう考えると、血の気が引いた。

「気づいているのは、キミと拘だけかい？」

ていうかキミいつから気づいてたの、そんな素振り見せなかったけどね。

さすが王、とでも言うべきなのかな・・・

「そうだな、最初から気づいていたぞ？」

「はあ！？」

早いにも程があるよ？何ソレ！全然気づかれていたなんて知らなかったよ！？もしかして勇者、あの時の動揺に気がついていたのか・・・？

「なんとなく。」

そんなわけなかったか。

うん、まさかの回答だよ勇者それは予想していなかったかな。

「そうか、そうだよ、キミだもんね・・・」

「なにがだよ、意味わかんねー。」

なんで一々つかかるのかな、まあ面白いしわかっていて言っているのだけだね。

「おい。」

「何かな？」

急に真剣な顔して、不思議に思っただけ聞き返したら背中から衝撃がきた。

「背後に気をつけろ、と・・・」

「嗚音ちゃん見つけー！」

「もつと早く言え！」

少なくとも抱きつかれる前に！

「やゝん、嗚音ちゃんいいニオイするゝ」

人間だよ、キミ！え？なんだかどこそその吸血鬼みたいなこと言っているよ！？誰かとは言わないけど！！

とりあえず勇者、助けてくれ。

目で訴えたら彼女（？）を引き剥がしてくれた。

おお！なんか意思疎通できたことが地味に感動できるね、なんか目で訴えて伝わってその通りに動いてくれる人が少ないから・・・むしろ逆に動く人が多かったね。

それにしても、さ。

「へ、変態ってどこにでもいるものだね・・・」

「俺は違うからな。」

それくらいわかるよ。

キミが変態とかだったならワタシどうすればいいの、かなり凹むと思うよ。

「えゝ？王様も結構性生活荒れてるじゃない。一人だけ常識人ぶるとかサ・イ・ア・ク」

聞かなかったことにしよう。

・（後書き）

遅い上に短くてすみません!!

番外・恋する乙女の暴走(?) (前書き)

ユニークが6000越え!というわけで番外!! 読者様方に大感謝
!!!!

べ、別に本編が進まないからっていうわけじゃないんだからね!
うん、自分でも馬鹿っぽいと思っていますよ! (+ + ;)
ベターなようでベターじゃない惚れ薬ネタです!

番外・恋する乙女の暴走(?)

「好き、リオ……」

「嬉しいけどね、何食べたのヤミイロ。」

わかんないよ！口と体が勝手に動くんだって！！

はい突然の告白に動揺の片鱗も見せないリオに若干のイラつきを感じながらも内心焦りまくっている今現在。

というか告白されて『何食べたの？』って酷くない！？

さあ何故こうなった！？と自問自答しても答えは見つかるはずもなく、一生懸命勝手に動く体からコントロールを取り戻そうと奮闘中（内心で）。

「愛してる。」

「そう？」

ねえキミ若干楽しんでいるふちあるよね？ワタシがこんなに大変なことになっているのに何クスクス笑ってんの！？

そうこう言っている（？）うちにワタシは（体が勝手に）腕をリオの首にまわして自分からキスをした。

あり得ないから、本気でありえないよちょっと何しちゃってんの
おおおお！！？

目を瞑っているからわからないけど無抵抗ってどういうことかな
リオ。

しかも暫くすると薄く開いた唇から舌を滑り込ませた。

「んっ……ふう……」

頼むから耳を塞がせてくれ。

吐息交じりの声もいやらしい水音も、自分が（体が勝手にだとしても！）させているのは耐えられない。

いや、他人のだとしてもだけど！

早く離れるという願いが通じたのか（いや違うと思うけど！）や
と離れたと思ったらんでもない一言言いやがった。

「抱いて？リオ。」

ありえねええええ！！！イヤイヤイヤ何これ、何コレ
！なんの羞恥プレイ！？

「直球のお誘いだね、いいよ？ シヤノン。」

そこは断れよ！

心の中のツツコミが届くはずもなく、彼はスタスタとベッドまで行くとそこに腰掛けた。

「おいで？」

誰がいくか死んでも行きたくないという葛藤も虚しく口には出せない。

ワタシの体はやはり勝手に動いて、彼のもとへ行く。

「優しくしてね？」

「多分ね？」

何を口走っているんだ！そしてリオ多分って何だよ多分って！

そうツツコミをいれるがもうワタシはベッドの上だし、リオは馬乗りになってワタシに覆いかぶさるようになる。

「リオ、好き。愛してる・・・」

「僕もだよ？シャノン。」

そこそつ答えるの！？

とりあえず本気で危なくなってきた、主にワタシの貞操が。

リオはワタシのシャツのボタンを、ゆっくり一つずつ外していく。これはアレだ、嫌がらせたる絶対！ ゆっくり焦らすようにしているのはワタシの羞恥心煽るためだろ！

$$\begin{array}{c} \neg \\ h \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \neg \end{array}$$

ボタンを外し終わると彼は下着のホックを外して手を滑り込ませ、何もつけていないワタシの胸をゆっくり揉んだ。

たちが悪いことにコントロールできないくせに感覚はあって、吸血時よりは幾分か弱い甘い痺れがおそう。

リオが首筋を、少し噛んだ。

「シャノン？もう動けると思っただけ……それともこのまま続けたほうがいい？」

「そんなわけないだろ！」

「……アレ？」

「喋れる……？」

「そ、じゃあ続けようか？」

「だから何故そうな、んんっ！」

先ほどの行為でたっていた胸の先端を摘まれた。

「ホラ、こんなに感じてるんだから、いいでしょ？」

「よ、くな……ああんっ……」

また敏感になっているところを攻められる。

いい加減にしろと睨むが、涙目と上気した頬では迫力皆無だろう。

「誘ったのはシャノンでしょ？」

「違うから！」

この後『見逃してあげるのは今回だけね。』と、どうにかギリギリセーフ(?)でワタシの貞操は守り抜けた。

ちなみにワタシのあの変貌というかアレは、ワタシを慕う(?)とある貴族令嬢が盛った惚れ薬もどきが原因らしい。

このことは魔王から聞いたのだけど、なんというか……うん、
無駄に笑顔が輝いていたよ！

番外・恋する乙女の暴走(?) (後書き)

はい、惚れ薬もっ薬ネタでしたー！

もどきっていうのはアレですよ、ホラ惚れ薬もっ薬って本当に惚れちゃうじゃないですか(多分)でもこの場合体だけ勝手に動いちゃってますからねー・・・シャノンちゃんがリオにベタ惚れとか現時点ではちよつと・・・『は、吐き気があ・・・』みたいな?はいやつぱり一生懸命拒絶きえつっていうのが好きなんです俺!そう簡単に両思いになられてもつまらないんです!

というわけで焦れ焦れというかまあリオにはガンガン攻めてもらいますが、その他もろもろのメンバーも・・・逆ハーですので!番外で書いてほしいのがあったりしたら言ってもらえると嬉しいです!!

これからも見捨てずよろしく願いします!

キマグレ?! (前書き)

キマグレ?と?の区切りが微妙だったんで?に付け足すという形に
しました。

本当すみません!!

キマゲレ？！

誰かが髪を梳いている感覚、しばらくするとそれは消えて今度はワタシの存在を確かめるように頬から首筋にかけて・・・おそらくは誰かの手の甲だろう、それが滑る。

フワリと柔らかいものが押し当てられる、額に、頬に、瞼に、首筋に・・・そしてそれが唇に押し当てられたときに、キスをされているのだと気がつく。

「！？」

驚きのあまりパチリと目を開けた。

「あ、起きちゃった？」

「！！！？？なっ・・・！？」

な　　ん　　で　　！？

唇をつくかつかないくらいの距離で、いるはずのない人物がいてしかもなんかさつきまでキスされまくって・・・なんで起きなかったワタシ！！

「魔、ムグツ・・・」

口を手で塞がれた、しかも結構乱暴に。

口を塞いだ本人は口元に人差し指を当てて、面白そうに微笑んだ。久しぶりというほどでもないが、紅い瞳が間近に合ってドキと・・・してない！気のせいだよ！？うん、これはアレだ、吊り橋効果？って違う！

「シー。静かにしないと声出なくなるくらい酷くするよ？優しくされたいでしょ？シャノン。」

なにを！？今朝！朝だよね！？いや夜でもご遠慮願いたいけども！！！！

とりあえず目が本気になっっているよ？やめようか笑えないって！
その微笑方はぜひ止めていただきたい！

これは頷くべきなのか？それとも横に首を振るべきなのか？！少なくともどちらの反応を示してもワタシに明るい未来（？）はない！！

そんなこんなで動けなくなっていたワタシに何を思ったのかは謎だが、とりあえず魔王は手を退かしてくれた。

って、いつか何で魔王いるの。

昨日は確かあの後勇者に『今日はもう遅いし疲れているだろうから寝ろ。』って言われて用意された部屋に行った。

和室だったからワイ布団だーみたいな勢いで（うん、やっぱり布団がいいね。）用意されていた寝間着みたいな薄くて白い浴衣を着てさっさと寝た。

で朝起きてこの状況はなんだあああ！！

「いつまで寝てるの、それとも誘「そんなわけがないだろう！？」今すぐ起きるよ。」

魔王の言葉を遮りながら光速で起き上がった。

それはもう目の前にいた魔王に頭突きする勢いで、当然のごとく避けられたけどさ！

もうしばらく会えないと思っていたのに・・・くっ、不覚。

「どうしてそんなに『会いたくなかった』みたいな顔してるの？僕はすごく嬉しいのに。イロイロできたしね・・・」

色々？イロイロ？！なにしたのキミ！意味深な微笑みはやめてくれ。

「もうそろそろ誰かくるね・・・またね？シャノン。」
そう言っ、立ち上がる。

ふとワタシを頭から足先まで見て極上の笑顔を浮かべた。

うっ、胸焼けしそうな甘さ・・・

「シャノンって中々寝相悪いよね、足とか胸とかかなりアブナイよ?。」

そう言われて自分を見下ろすがたしかにこれはやばい、胸元とかはだけているし足はスリットがはいたみたいに太もが見えている。

慌てて直すワタシを見て、クスリと魔王が笑った（極上の笑顔のまま）。

「僕以外の人には見せないでね？お仕置きするよ？」

『それはそれでいいけどね。』とワタシを一瞥して今度こそフツと姿を消した。

よし、絶対に他人には見せないようにしよう！などと心のうちで硬く決意をしたとほぼ同時に襖が開かれる。

魔王と入れ替わるように姿を現したのは、拘だった。

キマゲレ?! (後書き)

口は口で塞がせたかった・・・(ライ)

でもそんなことしたらリオがまた暴走しちゃうんでそれはちょっとという事で止めました!

やっとなぜ・・・早く魔王城に行かせたいなーみたいな。

そして勇者があまりにも哀れ!!全然アピール出来てないし!まずフラグたつてないっぽい!!勇者名前すらでてない!!!

あ、悲しすぎて涙が・・・本当可哀想なんでその内出してやります・
・

「嘆音殿は随分と寝相が良いようですね、誠に残念です。」

おい、何故だか本当に残念そうに見えるのだが？気のせいだといいな！？

「先程まで何方^{どなた}とお話しておられたのです？」

「は？」

その問いに、ワタシは固まった。

何故わかった？というか、もしかして盗み聞きとかしてないよね！？

「いるはずの無い下賤な魔の二オイ、それも高位の……」
あいつ！来るなら来るで痕跡とか消していけよ！被害くらうのはワタシなのだよ！？

ホラホラホラ、拘が悪い笑みを浮かべているよ？確実に何かたくさんでいらっしゃるよ？つてかもう殺されそう！！

そろりと目を逸らすと顎をつかまれ無理矢理視線をあわせられた。いつのまにこんな近くにきていたのか拘はもうすぐ目の前、唇がくつついてしまいそうだ。

「答えて、頂けますね？」

これはもう命令だ。

何故つて、コイツはもう聞いているのではない……確信している。

だが正直に答えるのもどうかと思うから絶対に答えてやるものかと思ってしまう。

「さあ、なんのことかな。気のせいじゃないか？」

別に死にたいわけではないけど、コイツか魔王なら魔王側に味方するか。

……沈黙が痛いよ。

けれどワタシが浮かべている笑顔は引き攣ってはいない（と思い

たい)。

しばらく見詰め合って(睨み合って!)いたが、先に口を開いた。

「まさか魔王に、恋情など抱いていませんよね?」

「微塵も。」

唐突な上に意味不明だし、即答した。

イヤ、意味はわかるよ?でもどこでそう思うのかかしいよね?レ
ンジョウってアレだね。

蓮杖じゃなくて連声じゃなくて恋情?ナイナイナイナイ。有り得
ない。

「では何故、彼を庇うのです?」

ワタシはワタシしか庇わないよ、絶対。

むしろ魔王なら庇うことなく突き出す!え?非道?そんなことは
ないよ、それくらいしてもいい気がするよ?被害者だもんワタシ。

「ワタシは自分に利益のある発言しかしないのだよ?気づいてい
なかったのかな?」

ニコリと笑って答えてやると、拘は小さく微笑んだ。

「そうでしたか?そのわりにはボロが出ている気もないめません
が?」

クツ・・・痛いところを。

確かにそうだが、十八の平凡な女子高生に完璧を求めないでくれ・

・アレ?ふと思ったけどワタシ平凡の枠外してる?

気を確かに持てワタシ、ここで認めてしまえば本当に外れてしま
うぞ。

黙りこくってしまったワタシに何を思ったかは知らないが、むし
ろコイツの思考なんぞ理解したくもないが、拘が顎をつかんでいた
手を離す。

と、ここで油断してしまったのがいけなかった。

「・・・！」

「隙だらけですね、囃音殿？」

唇に残る僅かな熱は・・・考えたくもない。

何か言ってやらないと気がすまないと口を開いたがもうすでに時遅く、拘は部屋を出て行った後だった。

・（後書き）

アレ？シャノンちゃんが酷いぞ？本当はわりとお人よしなんですが・

・

というかシャノンちゃん、リオに関して結構酷い？
そのうち変わる！・・・多分。

キマゲレ?! (前書き)

しまったあああああ!! 申し訳ありません一日遅れてしまいました
た!!! しかも短い!
次はちゃんとします。

キマゲレ?!

ぱくぱくと独り口を開閉していたが、冷静になれワタシ。

フツと息ついて額に手をあてて首を左右にゆるく振った。そうして、目に留まった紙。

拾い上げて見てみると文字が書いてあり、こう書いてあった。

『浮気はダメだよ。』

・・・・・・・・・・・・・・・・見られた？

いやちよつと待てなんでワタシが焦らなければならない?! まず浮気ってなんだよ!!

しばらくそうしていたがよく考えてみるあの魔王だ、わかるわけがないだろう!

わかってしまったら変態の仲間入り? それだけは嫌だ、嫌過ぎる。

「噂音様? 入ってもよろしいでしょうか?」

鈴を転がしたような澄んだ声が外から聞こえた。声の高さから女性だとわかる。

女性を待たせるわけにはいかないので急いでローブをはおってフードも深くかぶる。

「もういいよ? どうぞ。」

「失礼します。」

そう言って入ってきたのは明るい茶髪を左に流して結っている和服美人さん。

穏やかな笑みをたたえてワタシと目を合わせると、より笑みを深めた。

「おはようございます。わたし、今日から嘎音様の身の回りのお世話をさせて頂きます夕鶴ユツルと申します。」

ペコリと腰を折り曲げてこれまた丁寧テイネに挨拶してくれたが、頭をさげるのはやめて頂きたいな。

「いいよ、そんな丁寧テイネに挨拶しなくても・・・後世話係なんていらないよ。」

「拘様からの命令なので。」

苦笑しながら断ったら即答された。

拘からの・・・ね。監視のつもりかな。

けれど美人さんの笑顔はいいね、癒されるよ？輝かしい笑顔が誰かと一瞬被ったように見えたのはきつと気のせいだ！

アレとは違って癒しオーラ出ているしね、まず性別違うし。

キマグレ?! (後書き)

新キャラ(?) 登場!

シャノンとはリオのことをそれなりには意識しているみたいですね。

浮気現場(リオ視点)を見られて焦るくらいには・・・本人は自覚無いっぽい。

と、言うか人間ですらないしね・・・

「そう？じゃあよろしくね。してもらうことなんてないと思うけど。」

そう言つてニツコリと笑つたら夕鶴嬢も笑い返してくれた。

ほんわかとした空気の中声もかけられずに襖が開かれ、そこから出てきたのは少年勇者。

「やあ、おはよう少「いい加減それはやめろ！」

切り返しが早いねさすが少年、朝から元気でいいよ。

「少年、そういえば名前聞いていないね。」

「今更だな」

本当今更だよ、気づかなかつたワタシって結構酷いのかな？まあいいよね勇者だし、少年だし。

「お前今失礼なこと考えてたろ。」

「イヤ別に？で、名前は？」

アレ？なんでわかつたのかな？いまだ納得のいかなさそうな顔をしている勇者はこのさい無視だ。

というか本当に勇者の本名気になる。

このお城和風だからまさか横文字じゃなくて漢字かな、この金髪碧眼のいかにも勇者！みたいな彼が。

サユンユキシロ
「佐紺雪皚」

・・・・・・・・・渋っ！

純日本人、むしろ一昔前にいそうな名前！え？なに、この国で金髪碧眼って普通なの？！！

ワタシよりも日本人らしい名前に少し驚いてしまったよ・・・

「では少年。」

「少年じゃねえ！なんで教えた傍から名前でもばねえんだよ！」

「イヤ、やっぱり少年は少年でいいかって・・・ね？」

だって『雪皚』だよ？金髪碧眼の見かけ完璧勇者な彼が『雪皚』

！！抵抗ありまくりだからね！？

「ユツキー？」

「なんでだ。」

「ユキ？」

「お前俺の名前もう忘れたのか？」

「シロ？」

「犬か。」

どれも結構きつかったね、うん自覚ならある！

「まあいいや。雪皚。」

「何か自己解決したな。何だ？」

「イヤ、キミこそ何の用で来たのかな？」

まさかわざわざ名前呼びにさせに来たわけじゃないよね、そうなら殴るよ？夕鶴嬢との時間を返せ。

「少し忠告しにな。」

忠告？して貰うようなことはないと思うのだけど、彼の言うことなのだから一応聞いておこうかな。唯一の常識人（と信じたい）だし。

来いと手招きをする雪皚に近付いていったら、急に腕を引っ張られ彼に抱き込まれるかたちになった。

「その女には注意しとけ。」

耳元でそう言われ驚いて顔を上げると、真剣な表情の雪皚。

くっ、こうして見ると彼もかなり整った顔をしている・・・

ムカツクくらいに。

「っ！急になにしゃがる！」

とりあえず一発殴っておいた。

・（後書き）

やっとでてきた勇者の名前！かなり考えた結果が『雪皚』！！
そして勇者にはフラグたっているのか！？とりあえず何かとアクションおこしてほしい！逆ハ―だからね！！！

キマゲレ?!

「噂音様お風呂の準備が出来ていますが・・・如何致します?」

勇者を追い出してしばらくしたら、いつの間にか部屋から出て行っていた夕鶴嬢が戻ってきてそう言った。

そういえば昨日から色々あって入ってなかったね・・・現代の女子高生としてこれはどうしたものだろう。

うんお言葉に甘えよう!

「うん、入りたいな。案内してもらえる?」

昨日から入っていないというのは伏せておく。いやだって言いにくいじゃないか、ねえ? 複雑な乙女心というものだよ!

うん、自分で言って意味わからなくなったよ。

「こちらでございます。」

と、ついたのは暖簾のかけられた入り口。

それをくぐると広い脱衣所・・・無駄に広くないですか? ココ。

「あの?」

着替えたのですが何故あなたはいつまでもコチラを見つめていらつしゃるのでしょうか?

いや、女同士だから別にいいとは思っただけだね? こんな美人さんに見せられるほど自信ない! みせるつもりはない! むしろ見られたくはないよ?!

「ああ、お一人でよろしいので?」

「是非そうさせてください!」

お察しがよろしいですね!

「なにかありましたらお呼びください。」

必死そうなワタシがおかしいのか、クスクスと笑って出て行ってくれた。

服を脱いで（一応）タオルっぽいのを巻いて風呂場への扉を開ける。

（広っ・・・！）

どこの大浴場ですか？！みたいなかんじのお風呂でした。さすが王城、『お風呂』のスケールが違うね！

魔王城は部屋にシャワールームがついていたから・・・それでも十分凄いのだけだね。

「アレ？」

どうしよう使い方わからない。

なんかね、シャワーみたいなのはあるのだよ。風呂とはちがつて髪とか体とか洗い流すためみたいなやつ。

でも、蛇口がない。

「嘎音様？」

「わあっ！！」

よよよよよよかった、タオルまいていて！

「け・気配を消して背後に立たないでくれるかな？夕鶴嬢。」

どうしてみんな気配消すのが上手なのかな！？（今更）

後ろを振り返るとニッコリと笑顔を浮かべた夕鶴嬢。・・・誰かさんを連想させそうなその笑顔はやめてください。

・

「申し訳ございません、癖で・・・その使い方がわからないのですよね？」

どんな癖？！そしてどうしてわかったの、君エスパー？
とりあえず、わからないので素直に教えてもらうことにした。

「こちらにお座り下さい。」

シャワー（もどき）の説明をもらったら、いつの間にか小さな椅子が用意されていた。

手際いいなとか思いつつ座らせてもらう。

「お背中お流しますね。」

「うん・・・ってちよつと待って！！」

サラリと言うものだからつい肯定しちゃったよ・・・すごいねベテランさん効果。

キョトンとする夕鶴嬢、可愛いな。じゃなくて！

「自分で洗えるから、ね？」

苦笑しながら言うと、ワタシの笑顔なんか霞むような輝かしい満面の笑顔でスッパリ返された。

「これくらいさせて下さい。」

大人しくされるがままにした方がよさそうだね。

「髪だけ・・・お願いしたいな。」

体は無理。

「はい。」

渋々ながらも承諾してくれた。それを表情に出さないのが凄いね。木で出来た棚から瓶を取り出すと、それに入っていた淡い蜂蜜色の液体を髪に馴染ませた。

ほのかに甘い香りがする。

「コレ、何なのかな？」

「髪をキレイにするものです。匂いもいいでしょう?」

「うん。好きだな、この匂い。」

丹念に馴染ませた後は、これまた丁寧に洗い流してくれた。

髪の水を絞って軽く梳いてくれていた夕鶴嬢の手が、ふと止まる。

「? 夕鶴嬢?」

「囁音様のお髪、とてもお綺麗ですね・・・ずっと触っていたくなります。」

うつとりとしたように言う夕鶴嬢、いったい急にどうしたというのかな?

髪を梳いていた手が両肩に置かれた。が、おかしい。

その置かれた手は柔らかい女の人の手じゃなく、大きく骨ばった男の人の手。

ひしひしと嫌な予感はあるが外れて欲しいと、振り返りみたのは深紅の瞳。

「ねえ? シヤノン。」

「!!!!!!?」

驚きのあまり大声を出しそうになったが口を塞がれて無理だった。ちよっは? なんで! ? 夕鶴嬢は? ! !

この状況からしてその答えは一つしか導き出されないが、一応聞いてみようじゃないか!

とりあえず手を離してもらえたので、聞いてみる。

「夕鶴嬢はどこかな?」

「アレ、わからない?」

・（後書き）

やっと王道のイベントらしいイベントが・・・！！

とりあえず勢いにのって進んだんでストックもありますし。

調子に乗ってもう一回更新しようかなと思ったが、それで前痛い思
いしたんで止めておこう・・・

そしてリオは動かしやすい！！いいよねSキャラ、いいよね腹黒！！
と思うのは俺だけ・・・？うん、同類愛です。

いやもう嫌な予感ならひしひしと感じてはいるがね。

「ぼ・く」

「ご丁寧にも区切る必要のない短い一人称を区切ってゆっくり言い聞かせるように言ってくださいましたよ、それはもうムカツクほどに！」

しかもハートマークが語尾につきそうだよ？気持ち悪いな。

この美形相手に本気でそう思ってしまう自分は大丈夫だろうか、どうしよう。

現実逃避はここまでにしようか！現実を見てみよう、ワタシの格好はこのあらゆる意味で危険人物の前で正しいような格好ではない。

うん、タオル一枚は自分でもどうかと思うよ！！

「タ鶴嬢に化けていたのだね、うんわかったよ。だからさっさと出て行ってくれないかな！？」

「ヤダ。」

『ヤダ』ってなんだ『ヤダ』って！可愛く言っても無駄だからな！！

そしてなによりこの状況は非常に危ない、経験上。

経験といっても数度しかないが、そのたった何回かここまで危機感感じられるってある意味凄いなと思うよ。うん、キミって凄いよさすが魔王。

そこ感心している場合じゃないね！

先ほど肩に手が置かれていたが、今ちゃっかりワタシは抱き込ま

れている。

魔王の格好はいつもの白いワイシャツに黒いズボンじゃなくて、薄くて限りなく白に近い淡い紺色の着流しのようなものを着ている。背中にもる肌の感触が伝わって、何か恥ずかしいのだけど!!? そんな無言のワタシを見て魔王はクスリと小さく笑った。

「顔、真っ赤・・・まだナニもしてないのに、ね?」

ツ・・・と首の線をなぞりながら、無駄に甘ったるい声を耳元で囁くな! ベタベタ触るな心臓が持たないだろう!!

しかも まだってなんだまだって!! ナニかする気なのかい!?

「魔王つとりあえず、んっ・・・!」

しまった、振り返らなければよかったのに。なんて後悔先に立たずだけど。

振り返ったら口付けられて、気がつけば後頭部には手が回されていて避けようがなかった。

無遠慮に侵入してきた舌から逃げるもすぐに絡められて、無駄な抵抗。

もともとこの魔王に逆らおうとすること自体が無駄な抵抗なのだろうけれど。

長い長いキス、甘く溶けてしまいそうなソレに頭が鈍くなる。

ようやく離れたとき、抵抗の一つや二つもしなかったワタシは頭がおかしかったに違いない。

魔王は何がおかしいのかクスクスと笑っている。

その瞳は妙に熱っぽくて、視線を合わせてもらえない。

「ダメ。目、逸らさないで?」

クイツと顎を掬われ固定される・・・どこのタラシだデメエはよ。

「はなせ。」

「これでも結構ガマンしてるんだよ? あ、でもこのままじゃ危ないかもねえ。」

ナニが?

とりあえず聞かないでおこうじゃないか、うん。これが一番懸命な判断だと思うよ。

というか、そんな目でみられると勘違いしそうで嫌だ。凄く、嫌だ。

そもそも勘違いしそうでとか考えている時点でもうはまってしまっている。つかまってしまっている、彼に。

けれどワタシはその事実気づけるほど敏感ではない。

「キミさ、こういうことは好きな人とやるべきだよ。勘違いされて、本気な人に気づいてもらえなくなるよ?」

説教たれる気なんて更々ないが、一応警告程度はしておこう。

「ふうん・・・?」

「ちよっ・・・!魔王、なにっ」

言った傍からナニしているのかなキミは!!

魔王の右腕がわきの下からまわされて、左胸を包むように置かれたと思ったらゆっくりと揉みだきはじめた。

もう片方の腕は腰に巻きついていてる。

「勘違い、ねえ・・・」

熱い吐息が首筋にかかって非常にいたたまれない。

っていうかキミワタシの話聞いてないよね!? 大声出したいけど出したら魔王いることばれて絶対拘に何かいわれもない疑惑かけられる!!

なんて考えていたら首筋を舐められた。

「ひっ」

ちよっ、急になにすんの変な声が出てしまったじゃないか!

「可愛いね、シャノン。」

「だからっ・・・」

話を聞いとけ!

「可愛いのはいいけどね、鈍すぎるとこっちはいい加減苛々してくるんだよ。」

・（後書き）

リ才君暴走中。

「・・・・・・・・・・は？」

言った言葉の意味を理解するのに反応が遅れてしまった。しかも
やっと口から漏れたのは気の抜けた言葉にもならない音だけ。

ちなみにワタシは自分の事を鈍いだなんて思ったりはしていない。
「なにかつ、気付いて、いない、ことでも、あるのかい？」

今揉んではいないが胸に置かれたままの手を退けようと苦戦しつ
つ問う。

「つか外れねえし、どうしてびくともしないのかなこの腕！」

「あるねえ。この事になると鈍いんだから、シャノン。」

ため息混じりにそう言う魔王は何故か呆れている。

意味が解からない。

気付いていないのなら考えても無駄なのだが、全く心あたりがな
いのだ。

「だから、ね？」

「つ・・・・な」

手が退かされたと思ったら、そのままタオルを奪われた。

一瞬気を抜いてしまっただけにダメージ大きいぞ今！

座っているから下は大丈夫だとして、自分を抱きこむようにして
胸を隠す。もう条件反射だね、コレ。

「これくらい過激にしたら気付くかな？」

なななななな ナニに！？

え？ちよつと本気？コレ本気？ヤバイ・・・色んな意味でとても
危険だ！！

十八年生きてきた中で一番の貞操の危機。そんな事に顔色を変え
て内心きよどるワタシを見てクスリと小さく笑って、うなじに口付

けてきた。

そのまま強く吸って、次に肩、背、首筋と同じコトを繰り返す。ワタシはいえ、あまりにも焦り過ぎてどう声を掛けるべきかわからなくなっている。もう完全にパニック状態に陥っていると思う。

見透かされているようでとても癪に障るが、今そんなことは頭がない。

「シャノン。」

「な、に・・・」

もう頭ぐちゃぐちゃ、恥ずかしいしで顔を合わせられず前を向いて俯く。

そうしていたら腰に巻きつけられた腕とは反対の手が内腿を滑っていく。

「っ!？」

なんなんだ、なんなんだ!なんなんだコイツは!!どうしてこういうコトを恥ずかしげもなくできるんだよ!!!

羞恥も忘れてその手を掴みながら振り返るが・・・なんだかイヤな笑顔と細められた瞳と会った。

マズイ・・・と思ったときにはもう遅い。

「ふっ・・・」

再び深く口付けられる。

頭がついていけないのは慣れていなかからというだけじゃない。

長く甘いこの行為に酸欠して、激しく認めたくないけれど彼に酔ってしまったからだ。いやコイツ相手なら誰でも酔うと思うぞ。

上手すぎるのはこの際置いておこう。触れたらまず後悔するぞワタシ。

のぼせたようにクラクラする頭を軽く振りたいが、いつのまにか後頭部をがっちり固定されているためそれはできない。

「キミ、は・・・」

「んー? なぁに? シャノン。」

息も荒く口を開くワタシに、甘ったるく問う魔王を一発殴ってやりたい。

それにしても、解らない。どうして魔王がワタシにちょっかいをかけてくるのが・・・いやもうちょっかいの粋を超えているのだが。

アレか。ワタシが気付けていないナニが原因か？ 聞いても答えてくれなさそうだな。むしろこの行為に拍車をかけてしまいそうだ。

言いかけてアレだけでもよく考えたら問いてはいけないことだった。

さて、どう誤魔化そう。

・（後書き）

今日で一週間たっていると気がついた・・・
とりあえずもうリオはセクハラどころのハナシじゃないですね！

リオくんの悪戯・前（前書き）

14000人超え！来てくれる方々に感謝です！！
というわけでまさかの前後編。

お気に召していただけたら光栄です！！！！

リオくんの悪戯・前

「……………」

ここはどこだ。

いや、洋室だから魔王城に変わりはないのだろうけどここワタシに宛がわれた部屋ではないのは確かだ。

上半身だけ起すと、自然と自分の手とか目に入るわけだが。

整いすぎた繊細な指、白くて綺麗な手だが骨張った男の手……………
凄く見覚えがあるのだけど？

……………え、ナニコレ。

どうやらワタシは魔王になっているらしい。まったく状況を理解出来ていないけどね、状況説明できる方Come on。（発音よく言ってみた！）

「何コレ……………」

声低いな！ていうか美声、なにこの美声！！寝起きの低いテンションで混乱もあって唸るように呟いたのに何この美声！？

無意識に長めの前髪を掻きあげるが、何このサラサラ感。うわぁムカツクほどサラサラしているし柔らかい。

どという手入れをしたらこうなる・・・髪質の問題かこのヤロウ。などとグダグダくだらない事を考えていたら、ガチャリと入り口のドアが開き何者かが入ってきたようだ。

ちなみに考え込んでいたワタシは気づけなかった。

「うん、とりあえず成功かな。」

聞きなれた声の方を見ると・・・・・・ワタシがいた。

「・・・もしかして、魔王かな？」

「もしかしくなくても僕だよ、他に誰がいるの？」

うん、そうだよ。というか、ワタシが僕っこになっているよ。

目の前に自分がいるって凄い違和感あるね、ドッペルゲンガーを見た人ってこんな心境なのだろうか。

「とりあえず、状況説明をくれると嬉しいな。」

「つか話せ、絶対原因キミだろ。」

「状況っていつてもね、見たまんまだよ。ちょっと面白そうな術みつけたから試してみたらこうなったただけ。」

『だけ』じゃねえだろうが!!

コレ結構重要なことじゃないのかな!? 仕事とかどうするの!

!? 眼鏡くんまた困るよ?!

「それより、さぁ・・・?」

この緊急事態を『それより』で片付けやがりますかこのヤロウ!! て、ナニナニナニ!! なんなの!? どうして抱きついてくるのキミ!

「こうしていたらさ、シャノンが僕に迫ってるように見えるよね?」

なんてコトをさせようとしているのかなキミは!!

リオくんの悪戯・前（後書き）

短くてすみません！できれば後編一週間以内にしたいのですが・・・
がんばります。

長くなったら中もはさむかも・・・

後編！

あたふたしていたらガチャリとドアが開いた……あ、眼鏡君だ。

「なっ！ ナニをしている貴様！！」

「ウルサイよ、スイレアナ。」

「！！？」

顔を赤くして怒鳴る眼鏡君を一瞥して何やら呟いたと思ったら、ドアが勢いよく閉まって彼は締め出された。

あ、ワタシってあんなに冷たい視線だせるのか……じゃない！
「魔王？彼なにやら激しくあり得ない誤解をしたまま出て行った気がするのだけど？！」

そしてワタシはそんなに妖しい笑みは浮かべないからね！？
第一ワタシが魔王に迫るなんてこの世の終わりでもない……あ、やっと離れてくれた。

「ってオイなにしてくれてんだテメエ！！」

突然のコトに口調が崩れたじゃないか！ イヤそれよりも、なに脱ぎ始めているのかな！！？

手を掴んで止めるが、もうシャツの方は前が全開だ。
けれど、ヤツはなんともやな笑顔を浮かべやがった（ワタシの顔）
。あえて効果音を付けるなら『ニイ……』みたいな。

「は？え……ナニ？」

気がつけばベッドに押し倒されている状態。

つまり『ワタシ』が『魔王』を押し倒している状態。

ありえない。

クスクスと笑いながら首の線をなぞる『ワタシ』の指。

きつと今ワタシ（魔王の顔で）は情けない表情をしているだろう。見たかった、すぐく見てみたい。

「ナニ考えてるの？ リオ。」

そう言つと、口付けてきた・・・ヤメロ！！

ナニ？どこから出しているのその声！ それとワタシは自分からキスは絶対にながあつてもしない！！

「いいね、この体勢。」

・・・・・・ん？

「ねえ？ シヤノン・・・」

体に力が入らなくなりそうな程甘くて低い美声。

目を開ければ、下にいるのは魔王・・・あ、もどつてる？！！さつさと退こうとしたが、そのままの体勢で抱き締められた。

「！？・・・魔王、重いだろうから退かせようか。」

気にするのはそこのか自分！

上に乗った状態で抱き締められているし、イロイロきつい。

「ん？重くはないよ？それに、柔らかいよねえ。」

『どうしようか？』低く掠れた声で囁かれる。

「っ・・・の確信犯め。」

後編！（後書き）

終ー了ー！！

ちなみにリオはこのあとシャノンに吹っ飛ばされてほとんどなににも出来ず終い。

残念また今度！！？（・・・；）

そしてとりあえず次話投稿も遅れそうです。

そして感想増えてた・・・感動しました！有難うございます！！
／／／／／（

「いい歳して痴漢行為か、リオ。」

「雪皚!？」

天の助け!! 今心の底から感謝したよ雪皚! そして魔王の舌打ちなんて聞こえないよ?!!

「キミこそなんなの、雪皚? 若者二人の戯れくらい見逃してくれてもいいんじゃない?」

「戯れで犯罪に走られても困る。」
眉を寄せため息をつく雪皚。

何でキミ魔王がいたのに驚きもしないのかな?

「しかもいい歳ってなんなのさ。君の方だろ? 僕より五つも年上のくせに。」

「ウソ!？」

見えないよ!?

せめて二十歳くらいかと思っていただけ、もう二十七!?

「本当だ。幾つだと思っていただんだお前は。」

「もう少し若いかな、と・・・」

重々しくため息をつく雪皚。

あ。若く見られるのは嫌でしたかそうですか・・・

こちらに歩み寄ってきたと思ったら、羽織っていた紺の着物を掛けてくれた。

そしてついでに魔王と引き離してくれた。(あ、ヤバイ惚れそう・

・・)

魔王が物凄く不服そうな表情をしている気がするが見てないよ！
大丈夫、きつと気のせい。

無理矢理自分を納得させてきちんと魔王と目を合わせる。
なんかため息吐かれたのだけど何故！？

「しょうがないけど、今日はこれくらいにしといてあげるよ。シ
ヤノン。」

そんな物凄く残念そうに言わないで欲しい。

・（後書き）

次は・・・やっぱ次も遅れるかもしれません。orz

とりあえず未遂。

よかったねシャノン！！

俺的には残念。大丈夫、18禁にはならないから！（たぶん）

キマゲレ?!

「まだここにいるつもりなのかい？」

「あら、なんのことでしょう。」

ワタシの目の前にいるのは魔王もとい夕鶴嬢。

キョトンと目を丸くし首を傾げる・・・その仕草は破壊的に可愛らしいのだが、中身はあの変態だ。

でも、でも！ 本当に中身を忘れて普通に外見だけ見たら癒される。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そんなに警戒しなくてもいいじゃない。」

なんか笑顔の種類変わった！ ついでにその姿でその声は止めてほしい・・・

てか、警戒されているのどこか嬉しそうなのは何故。

「ん？君、警戒心なかったからねえ。僕も意識されてなかったみたいだし・・・さっきのが相当効いたのかな？」

「な、何を言っているのかな？ とりあえず次やったら吹っ飛ばすよ。」

思い出させないでほしい。そして今更ながら気がついたよ。

ワタシ魔法使えるじゃん！！

やあ……先ほどはパニックに陥っていたから忘れていたよ。
……情けないねホント。

「そう。大丈夫だよ、次はちゃんと抵抗できないようにしとくから……ね？」

ななななな何この人！！ 全然大丈夫じゃないのだけど！？
しかも『ね？』て何だ『ね？』って！！
ちよっ、コイツと二人きりの空間とか本気でイヤだ。

「それでは、お腹も空いたでしょうし朝食をお運びしますね。」
ニツコリ。どうやってたらこும்違う種類の笑顔を使い分けられるのか心底不思議に思った。

キマグレ?! (後書き)

やっと書けた?...

テスト終わったあああああ!!

でもテスト返ってなくていいです。見たくない!

多分ペース戻ります。一週間に一回くらいの投稿です。

・

「……………」

手に取ったお茶を口元まで持っていき、そしてまた戻した。

「魔王……？」

「はい、なんでしょう？」

あくまでシラをきるらしい、魔王とあえて呼んだにもかかわらず
夕鶴嬢の口調で返してきた。

まあいい。

スツとお茶を指差し笑顔で問い掛ける。

「コレは、何かな？」

「媚薬入りのお茶ですね。」

もうイヤだ！！

「毒を盛るのは止めないか？」

もちろん先ほどの毒入り茶は下げてもらった。

「毒じゃないよ？媚薬とかソコラへん。」

「それは毒だ。」

爽やかな笑顔でナニ言っちゃってんのキミ。

駄目だ、この人（人間じゃないけども！）全然反省していないね・
・といか反省したことあるのか？

全然想像できないよ、というか気持ち悪……くないよ！（すごく黒い笑顔を向けられた）

「ところで、次はいつ誰が戦うのかな？」

この話を終えないとおかしな方向にいきそうなのでとりあえず気になることを聞いてみた。

唐突なワタシの質問にも動じることなく当然のごとく対応できる
あたりが若干イラッとするね！

「次は明日だねえ、使うのはリシエラかな。そちらが誰を使うのかは知らないけどね？」

「……彼は強いのかな？」

「僕よりは弱いね。」

・ ・ ・ ・ ・ そうだろうね。

・（後書き）

すみません一日遅れの更新。

大丈夫です、確信犯ではなく素で忘れていただけになお質が悪いですから！

そして次話ではリシエラが戦います！！（多分！）

久々の登場なので頑張っしてほしいですね・・・？！はコレで終わりです。

キマグレ?!

「シャノン、久しぶりですね。」

にこやかな笑顔のリシェ嬢。

いつもみたいに女装はせずに前に別れた時と同じ格好だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・そうだ、ね。」

目が合うやいなや、サッと目を逸らした。

いやマジで謝るからその絶対零度の笑顔を向けるのは止めていた
だきたい。本気と書いてマジと読むのだよりシェ嬢知っていたか
な？

「勝手に出て行ったことは悪いと思っている（ぶっちゃけ思っ
ちやいない）のだよ？」

「そうですか？」

ヒイツ！ 怖っ！！美人さんの笑顔を怖いと思うのがコチラの世
界で一日一回はあると思うよ！

そして何故誰も止めに入ってくれないのかな！？

今日は本当は本人達しか来ないようだけど、ワタシは別だ。

というわけで今ここにいるのはワタシとアヤネ・リシェと・・・

「もうっ、何なの？ リシェラだけズルイっ！」

伽羅だ。

この際ナニがズルイのかは置いておこう、それより助けるよ。

「伽羅、相変わらず気持ちの悪い喋り方ですね。僕と違って女装はキツイでしょう？ 可哀想すぎて涙が出てきます。」

そう言いつつもその表情は笑顔だ。目が笑っていないけど、めっさ悪い顔だけど！ それでも美形は得だ、正直カッコイイ。というか、アレ？・・・リシエラ嬢って、厭味とか言う人だったっけ？

「シャ・ノ・ン・ちゃあん！」

「わっ」

「離れてくれませんか？ シャノンが枯れます。」

「どういう意味なのかな！？」

枯れるの！！？

そして伽羅嬢抱きつかないで頂きたい、重いです。

それとね、アヤメ君？キミ、笑い堪えているのバレバレだからね？

キマゲレ?! (後書き)

久しぶりのリシエラ。

うん、次こそは戦闘？

あと伽羅は名前一回、しかも拘によばれたくらいですね・・・

・

「それじゃ、始めてもいい？」

あれから言い合いをはじめた二人をなんとか宥め、アヤメにも早く始めるよう急かし、やっとゲームを始めようとしているところだ。今回は浅い水溜り・・・もとい泉のような場所の上で戦うらしい。水は二人の足首辺りまでしかないが広さが半端ない。

森と空が移りこんで非常に綺麗だ。

「いいですよ？僕は。」

「私もオツケーよ！」

二人ともそれぞれの武器を手に持っている。

リシエラ嬢は両手にナイフ、伽羅嬢は片手に・・・大きな刀。

あんな得物振り回しているから女装が似合わないのだね、わかったよ。

まあ服のチョイスが悪いのもあるけどね！

前回のようになり結界が張られ、二人は動いた。

・・・スミマセン速くてよく見えないよ？

「二人とも暗殺とかそういうの専門だからね。」

ニコーツと無駄に無邪気な笑顔のアヤナ・・・暗殺とかそういうのですか・・・。

伽羅嬢はあんなデカイ刀で暗殺とかできるのだろうかとか疑問に思ってたよ。

とりあえず目で追うのも辛い。

観ることを若干諦めかけていた時、一際大きな金属音が響いた。

「ねえ？そのムカツク髪色なんとかしなさいよ、目障りだわ。」

「え？奇遇ですね、あなたもその鬱陶しいヅラ外したらどうです？ ついでに化粧も落としましょう。」

ギリギリと互いの武器を交じあわせて刺々しく言い合う二人・・・息一つ乱れていないとはどういうことだ。

素早く距離をとり、リシエラは煩わしいのかその桃色の長い髪を後方に払った。

「仕方ないですねえ・・・」

「こっちの台詞よ。」

・（後書き）

戦闘描写は・・・次・・・？

とりあえず色々忙しいので早めに更新しときます！
明日更新できなさそうなので・・・

・

スツと二人が手を動かした。

するとリシエラ嬢は髪が銀色になってよく見たら目の色も濃くなっていた。

伽羅嬢は………誰だあの王子様フェイス！

「どーおー？ 嗚音ちゃん！ カッコイイー？」

「無駄な発言はしなくてよろしいですよ、シャノン様。」

キミはキミでなんか印象変わるよね。

伽羅はあの手に持っているのがカツラだろうね、白いし。

本当の髪色は明るい紺色で先の方にいくにつれ淡い色合いになっていて短髪。瞳の色は変わらないらしいが、化粧一つでこうも顔の印象って変わるものだったわけ？ まあいいや、深く考えるのはよそう。

「それよりも、さっさと終わらせましょう？ 伽羅様。」

「そうねえ？ あたしも早く帰りたいし。」

再び刀を構え、目つきを鋭いものへと変えた。

片方の口角を吊り上げ不敵に笑う伽羅、嬢……え？ 幻覚？

「すぐにバラして終わらせてやるよ。」

じゃなかったー！！

・（後書き）

伽羅は真っ黒黒すけ。
そして更新遅れてすみません！！

・

とりあえずさ、王子様フェイスでその黒すぎる発言はよそうか。

「跡形もなく消し去ってさしあげますよ。」

トリシエラ嬢の発言のち大量に放たれる銀色の刃………を軽く避けたりいなす伽羅。

伽羅嬢は、人間だったよね……？

さすが異世界なんでもアリだね、伽羅嬢の動きはもはや人間業じゃないよ。

次々と放たれる刃の合間を息も切らさずすり抜けて、リシエラ嬢の目前へ……

『ニイ……』と笑うさまはまさに悪役だ。

刀を振り下ろすがリシエラは後方に飛びのき回避。双方の力は五分五分といったところだろうね。

「……ねえ？アヤメ。」

「なあに？」

「まだ終わらないのかな？」

「まだ決着ついてないでしょ？」

「そうだね……」

なんか、決着とかつかなさそうなのだけど……

とか思っていたら泉の水がビキビキと音を立てて凍りはじめた。

リシェラ嬢笑顔が黒いよ？

「イきなさい？ 大丈夫です安心してください、特別に苦しませてさしあげますから・・・」

大丈夫要素どこ！？ うわぁ悪趣味さすが兄弟だね！！

凍った水が竜の形になりおおきな口、しかも牙は鮫のように鋭くズラリと並ぶそれを開け伽羅嬢にすごい勢いで迫る。

伽羅は避けるが竜は何の抵抗もなく氷の泉に吸い込まれていく、どうやら竜にとって氷は水と同じようなモノらしいね。
竜の猛攻はとまらず伽羅嬢を襲う。

「足元にもご注意くださいね？」

「っな・・・クソッ！」

につこりと素晴らしく可愛い笑顔とともに忠告したと同時に、伽羅嬢の真下から現れた竜の巨大な口・・・逃げ場は、ない。
バクン と閉じられる口。

けれど次の瞬間飛び散ったのは氷の竜。

「え・・・？」

首筋に突きつけられたのは巨大な刀、嗤っているのは伽羅嬢。
ええと、とりあえず説明・・・多分、本当に全然見えなかったけど！ 噛み砕かれる前に内側から伽羅嬢が刀を振るって逆に竜を砕いた後、物凄い速さでリシェラ嬢の後ろに回って刀を突きつけた（

と思う)のだろう。

これ・・・止めないと伽羅嬢本気で殺る気だね。

「ハイ、そこまでだよ！一応殺しはしちゃダメになってるからね

」

アヤメのどこまでも明るい声音が伽羅嬢を止めてくれた。

・（後書き）

遅れてすみませんでした！ついでに戦闘シーンしょぼくてすみません！！

でも終わったあああ！！やっと終わりましたよ？！

次は多分メガネ君ですね、番外でポロツと本名でしたが・・・

キマグレ21！

あれから城に戻って何故か伽羅嬢とお茶している・・・
アレ？本当になんでかな？

「チツ・・・むかつくなあ。」

「ナニがだい？」

ちよつ、なにこのコ怖い・・・！

ワタシこれでも一般人だから、そんなオープンで黒くなられても心臓もたないから！

という心の中の葛藤は聞こえなかったらしく（という事は腹黒属性ではないらしい）、一瞬キョトンとしてこちらを見た。

え、ナニ？

「気づかなかったの？あのムカツク髪色したヤロウが手え抜いてたの。」

や、そんな高度な観察眼望まれても。

そしてしばらくの沈黙・・・伽羅嬢、そんなにジツと見つめられても何も出ないよ？　　というかやめてほしいな穴が開きそうなのだけ
ど。

「うん、まあ・・・不思議だね、アンタ。」

「ナニが不思議なのか突然すぎて検討もつかないね。」
本当に突然どうしたのキミ。

どうしよう嫌な予感してきた・・・まずその企み顔をやめようか。

「喰音ちゃん、雪皚に勝ったんだろ？強いはずなのに隙だらけ。」

・・・否定は、できないネ。

アレ？何か似たようなことを魔王にも言われたような・・・？

「オレが背後にいたって抱きつくまで気づかなかったし・・・」

普通物音立てずに背後にいられたら気づかないものじゃないのかな？

というか何なんだい？ナニが言いたいのキミ。

「まあ可愛いからいいけど。」

「ぐっ！」

変に渴いた喉を潤そうとお茶飲んでる最中だった！ ナニ急言い

出してんの吹いちゃいそうになったじゃないか！！

・・・まあ、なんとか頑張って止めたけどもさ。

「話が飛ばなかったかい？」

「そ？てか、照れてんの？かーわい」

どこぞのチャラ男みたいだね。

なにかはぐらかされた感是否めなかったのだけど、結局ここでお茶会はお開きになった。

キマグレ21！（後書き）

はい連載再開！

・・・イエ別に停止していたわけではないんですけど。

そして久しぶりに書いてみてサブタイトル書いていた時に重要なことに気がついてしまいました・・・！

数字の？というこれ、？までしかでない。orz

まあ仕方が無いのであきらめましたかね！！

とりあえず遅くなりましたがこれからもキマグレセカイを見捨てず
お願いします！！

・

「あまり他のヤツらと話さないでね？」

「・・・突然だね。」

いつものようにさりげなく人の部屋に不法侵入している魔王。
うん。本当たり前のようにいるよねキミ。

セキュリティ・・・見張りとかだいじょうぶかい？ 王城なのに。
というかなんだいキミ。ワタシの彼氏かなにかじゃないのだから・
・

「恋人じゃなくても嫉妬くらいするもんじゃない？」

「口に出ていたのかな？」

「うん、そうだね。」

「・・・気を付けよう。」

というか、え？ 嫉妬？ なに魔王が？

「吸血鬼でも風邪はひくのかな・・・」

「熱はないし冗談でもないから安心していいよ、シャノン。」

笑顔に輝きが増したのは何でかな！？それと安心要素ドコ！！？
今更だけどやつと気がついた・・・魔王怒っているね！

「え、ちよつと何でだい！？」

全くもって心当たりがないのだけど！？

「だって君、本当に全然気づいてないんだもん。」

「なにに？」

「僕が、君をどう思ってるか・・・とか。」

「は？」

一瞬思考が止まった。

・（後書き）

リア充○○しろ！

を聞きながらの投稿・・・

いい歌だね、うん。orz

そして6歳差ってロリコンかと切実に問いたい！

・

「・・・・・・・・わからないよ。」

何故か声がうまく出せなかったけれど、なんとか頑張って普通に話す。

だいぶ同様してしまったけれどね、これは本心だよ？

「そう？」

ああ嫌だね、その笑顔。

笑顔が物語っているよ『本当に？』って・・・背後の黒い霧が気になります。

・・・ちよつと、魔王が急に变なこと言い出すから突然シリアスに突入しちゃったじゃないか！

あ、フザケテすみませんでした！！

「余裕だね。シャノン？」

「フツ余裕なんて欠片もないよ。」

そのせいでキャラまでもが若干かわっちゃっているしね！

真面目に考えるからその黒いモノをしまつてほしいな・・・溶ける

「でもね、キミ本当になに考えているのかわからないよ。」

「ふうん・・・」

そんな心底残念そうな声出さないでよ、地味に凹むから。

ちらりと視線を魔王へやるとバチリと目が合った。

「じゃあさ、シャノンが僕のことどう思ってるの？」

「え・・・？」

こういうときだけ真顔になるのはやめないかい？ 趣味が悪すぎるよ。

でも、そうだな・・・考えたことなかった気がするね。

友達？・・・いやいやいや魔王の友人だなんておこがましいよ！

(・・・)

「アレ？」

そういえば本当になんなのだろうね、微妙だよな。
なんか今更だけれど・・・

「・・・難しいね。」

「僕のコト好き？嫌い？」

女子学生かい？キミは。

ツツコミが頭をよぎったと言わなかった！　そこまで空気読めなくはないよワタシ。

悶々と考えていたらいつの間にかすぐ近くまで来ていた魔王。
今すぐくびつくりした。けれど、魔王の表情はよく見えない。

「抱きしめて、キスして、それでも・・・気づいてくれないの？
好きになってくれないの？」

「え？」

触れるだけのキスをして、ぱちぱちと瞬きをしている間に忽然と姿を消してしまっていた。

けれど最後に見えた彼の表情がどこか切なげなのは気のせいであつてほしいと無性にそう思った。

・（後書き）

リオが可哀想になってきた今日この頃・・・。

進展しそうだけでも！ これでも本気でリオの思いに気がつかない
シャノンはどうなんだろう（ ; ）

鈍感ではないはず・・・なんですけどね！！

キマグレ22！

「好きだよ、シャノン。」

聞こえないとわかっていて呟くけど、けっこう虚しいよねえ・・・好きなコに好きだって気づかれないヤローほど悲しいヤツってないと思うんだよね、僕。

・・・まあ、その可哀想なヤローが僕なんだけどね。
あーあ、損だよネホント。

「性格のせいじゃない？」

(・・・。)

「っはー・・・」

「な、なにそのいかにも会いたくなかったっていう反応・・・」

うつわー・・・嫌なヤツがきた。

突然何の前触れもなく現れた銀髪キツネ目の見掛だけは青年くらいのヤツを睨み付ける。

どうしていんの？　むしろなんで生きてんの？　早く消えてほしいんだけど。

「うう・・・心の声と冷たい視線が痛い・・・」

「仕方ないよ、兄さんアンタのこと大嫌いだからね。」

「リシエラ・・・なんでコイツ僕の部屋にいられたの？」

「元魔王を力ずくで帰らせると？ 無理だよ、僕じゃさ。」

まあ、そうだよねえ……いくら純血でも、魔王との違いは歴然だし。

ていうかウザ。ニコニコニコニコ……ナニその目開かないの？ キツネ目やめろよ。

「お父さん嬉しいな やつと二人にも想う相手ができて……可愛らしい異界のお嬢さんだったね。」

お父さんとか……ウツゼー。

その心底安心したとかいう表情イラつく、マジで。うん、すごく殺したい。

袖の無駄に長い、隠れた手で口元を隠してクスクス笑うセイン（クソオヤジ）。

「セイン様、何のご用件で戻られたのです？ そろそろ兄さんの魔力にあてられて倒れます。僕が。」

「ん？ あー、ゴメンネ。ちょっとした忠告だよ、キミたちにね。」

キマグレ22！（後書き）

まさかの父親登場。

リオは父親のことになるとすさみます。

もうそろそろ物語を進展させたい・・・あと、拍手をようやく設置できました！

拍手お礼文、月ごとに変えます。

今月はハロウィンネタ！

・
薄く目を開くクソオヤジ。目の色は僕と違って鮮やかな牡丹色。
リシエラは目をそらす。あまり魔力の強くないリシエラだから、目
が合ったらいけない。

強い力にはダレもが魅入られるモノだから。

「なに？忠告って。」

やな予感しかないんだけど。

そう聞くと、クスリと笑うセイン・・・ああ嫌だなこついうの。似
てるって自覚あるからなおさら嫌なんだよね。

「彼女のコトは、諦めなさい。」

「イヤに決まってるでしょ？」

「馬鹿じゃないですか？」

「だろうね。」

ゆっくりとさとするようにいった言葉に間をおかず答えた。

予想くらいついてたんだろうね、表情変わってないし。気に食わな
くて睨みつけていたら元の表情に戻るクソオヤジ。

「んー・・・まあいいや、けど忘れないでね？ 彼女はいつか帰ら
なきゃいけないんだよ。」

言い捨てて漆黒の翼を広げた。飛び去ろうとするその姿はまさに魔王。

というか、わかってる事を言われるほど腹が立つ事はないよね。僕だってわかってるんだよ・・・

シャノンがいつか帰らなきゃいけないことくらいね。

・（後書き）

終わりが・・・見えない。

展開的には終盤っぽい・・・が！

なんか最近おちが見えないんです。そしてガンバレ
リオ。

アリスパロ?! (前書き)

ユニーク数28 / 375人!

読んでくださっている方々に感謝!!

というわけで番外。

アリスパロ？！

アリスといえば、青いワンピースに白いフリルのかわいいエプロンの女の子。

……閨色のローブをまとった怪しいことこの上ないアリスなどいないだろうと我が事ながらに思う。

「アゝリス！」

「わあっ！」

白いウサギ耳が無駄に似合う長身の美女もとい美男が背後からもの凄い勢いで抱きついてきた。

追いかけるのはワタシ（アリス）の役目であってキミ（白ウサギ）の役目じゃないんじゃないかな？

それが自らのこのこ出てきてどうするんだ、きちんと役目は果たしましょう。

そんな注意なんてするひまなどなく、突然視界が反転したと思ったら担がれていた。

「今度はなんだ！」

「え？女王様に会いに行かないと、ね？」

誰だよ女王！

え？なに？ハートの女王？誰？つかまさか早速処刑！？

イヤすぎる

「フッフ、命が惜しいから全力で抵抗しようかな。」

そうワタシが冷や汗を流しながら言うが、白ウサギはニンマリと笑い衝撃の一言。

というかその表情からして嫌な予感しかないよ？

「大丈夫よ？命は安全だから」

命は？“は”ってナニ！？そこ強調するの！？

なんだか叫びもむなしく城に連行されていきました（泣）

アリスパロ?! (後書き)

短い・・・

そしてどうしよう思いつかない・・・(0 0 ;)

それと今月の拍手文番外じゃなくて連載しようか迷ってる小説の短
編的な・・・

ダイジョウブ。スランプなんてすぐ抜けるさ (´・`・´)

・・・すみません!! orz

アリスパロ？！

「ようこそハートのお城へ」

「なに？キミら仲いいの？え？」

結構険悪だったよね？

白いうサギから三日月ウサギに引き渡された。

「女王様ってダレなのかな？」

「それは会ってからのお楽しみだよ。」

大体予想はつくけどね・・・。

それより腹が圧迫されて吐きそう・・・ウツ・・・

「吐いたりしたら落とすからね？」

「軽い冗談じゃないか。ははっ・・・」

ゴメン、わりと本気だったよ。

ていうか客なんだからもう少し丁寧に扱ったらどうだろう。

「ついたよ、はい。に・・・女王さまー？アリス様がお着きになりましたよー？」

コンコンと扉を軽くノックして少し大きめの声で中へと呼びかける三日月ウサギ。

あれだよね『兄さん』て思いっきり言いかけたよね。

「まあっ！本当ですか？」

夕鶴嬢の声だよ。魔王の声で今の台詞はキツすぎる。

ガチャリとドアを開けて出てきたのはドレスすがたの夕鶴嬢・・・
美女は何着ても似合うね、うらやましい限りだよ。

あと笑顔が眩しいです！

・・・あつても本性魔王だった。

「どうぞどうぞ、部屋にお入りになつて？」

魔王よくそんなしゃべり方できるね。なに、趣味？ははつまさかね！！

「兄さん、まだ仕事の途中でしょ？それと抜け駆けだなんてよくないと思うなあ。」

リシエラ嬢怖いよ黒いよ笑顔が！！

うわぁ嫌だこの兄弟間にいたくないよ！？

思わずというかわざとというか後ずさっていたらガシリと両腕を掴まれた。

二人を見るとドSな笑顔。うわぁ嫌だ。（二度目）

「「どこに行くの？」」「

さすが顔はあまりにいていなくても双子。息ぴったりだね

しかもなにキミいつのまに夕鶴嬢から魔王にかわっちゃってんの・・・
・・・とか冷静にしている場合じゃなよワタシ！

え、あ、どうしよう逃げ場なし!?

「じゃあちよっとお茶でもしょうか。」

「寝室でもいいけどね。」

「僕は3Pでもいいよ。兄さん?」

「却下。」

「残念。じゃあ気が向いたらいつてね?」

・・・意味はわからないけどとても悪い予感がしました。

あれ、コレアリスパロじゃなかったっけ?

アリスパロ?! (後書き)

月またいじったよ、すみません!!
次回から本編です!

キマグレ23！

「シャノンはさ、むこうに帰りたいの？」

「え？このゲームが終わったら帰れるのだよね？」

いつものように夕鶴嬢から魔王に姿を戻して部屋に居座る魔王の問いに即答したら何故か機嫌が悪くなったようだった。

「……あれ？なんでそこで機嫌悪くなるの？意味わからないのだけど

ダーンッ！

ビクリと体が大きくはねた。ちなみに今の大きな音は魔王が壁に拳を叩きつけた音だよ。

しかもワタシの顔のすぐ横。

「っ……！？」

「ねえシャノンはさ……」

え？　ワタシ何か失言した！？　なんでそんな怒ってんの！！？
今までにもなんか魔王の機嫌を損ねたことは幾度かあったけれど原因がわかった試しはない気がする。いや確実じゃない！
つまりところ考えてもわからない！！（開き直り。）

「僕と会えなくなることとか、考えないの？」

「え……」

あ、そうか。

県とか国とかそういうレベルじゃなくて、世界を超えるのだからそう簡単には合えない……というか、帰ったらもう二度と会えないかもしれないわけで。

(それは……)

「悲しく、ないの？」

「それは……っ……」

わからない。

というよりこの前からワタシなんかオカシイよ？え、なんで。

「好きだよ。」

「………え」

突然すぎることで疑問形にすらならなかった。

てか、え、聞き間違い？

「好きだって、言ったんだよ。」

飲み込めていないワタシに苦笑しながらもう一度言う魔王。
その表情がっこいいね。……じゃなくて。

どうしよう、あまりに突然のことすぎて現実逃避に走り始めちゃっ

たよ。

ああもう本当、ワケがわからない。

キマグレ23！（後書き）

なにこの急展開！！

久しぶりに書いたら展開はやっ！

そして最近違う連載ばりばり書いていたらキマグレのテンションについていけなくなっちゃった（@ @；）

・・・なんで誕生日に必死こいて進めたんだろう自分（遠い目）

・

「好きって言われても・・・」

「あれだけ積極的な態度をとられて気付かない方が不思議だな。」

「うわっ！」

「盗み聞きなんて、野暮だなあ。」

「気付いていながら告白する彼方も相当性質が悪いですよ。」

何故拘と雪皚がいるんだい？

え、ナニ今の流れ全部聞いていたのかな！？

「あーあ、本当邪魔だよ。特にその妖怪とか妖怪とか・・・」

つまり妖怪が邪魔だったんだね、わかったよ。

「・・・え！？」

「長い沈黙だったね。いるじゃないそこに鬼が。」

「私のことですね。」

なんか納得しちゃっている自分はどうなんだろう、なんて。

“鬼”ね・・・妖怪までいるなんてなんでもありだな流石異世界。

「ああもう君達がきたせいでシャノン別のことに意識がいつちゃってるよ。どうしてくれるの？」

苛々としている様子の魔王はクシャリと自分の髪を掴んで二人を睨みつけた。

うわっ、猛禽類みたいな目だから余計に迫力ある。

忘れてはいないのだけどね、さっきの。

それを事実として受け入れていないワタシは酷いかな？

まあ魔王が本気ならそれってすごく酷いことだとは思っけどね。

とりあえずあちらの方で静かに嫌味を言い合っている魔王に視線だけを向けると、案の定バチリと目が合ってしまった。

「シャノン。今すぐにじゃなくていいから、答えをきかせてね？」

まだななにか言いたそうな拘たちを置いて、いつものようにフツときえた。

……この空気をどうしてくれるのかな、魔王。

・（後書き）

なかなか主人公が酷い。

いやー難しいねー、テンションについていけないって言うかもはや展開にすらついていけない作者ですよ（殴

どうしようこれもう数話で最終回な勢いだよコレどうしよう；
でも次の更新は年明けですかね、すみません。

新年早々最終回迎えそうです。

でも！クリスマスには番外投稿します！！

本当ぐだぐだですみません！

読んでくれる方々ありがとうございました！

イヴ！

「イヴだね。」

「イヴだな。」

「そうですね。」

「もっともりあがろうよ。」

「黙れクソオヤジ。」

「わぁヒドイね。」

「その　ウザイ。年甲斐もなくやめてくれない？」

「・・・こんな子に育てた覚えはないんだけどねえ。」

「リオには甘いですね。あなたは。」

「ユツキー！君だけだよそう言ってくれるのは！..！」

「.....そうですか。」

「雪皚引いてるよ。」

「これ、イヴの番外なのだね？..！」

「明日はちゃんとクリスマスの番外するらしいよ。」

「・・・・・・・・ふうん。（ワタシ発言してない・・・・・・・・）」

「なにかある？」

「何にもないですよ？」

「ないな。」

「えー？」

「黙れ。」

「終わるか。」

「……………そうだね。」

「じゃあ帰るね。」

「二度と来なくていいよ。」

「・・・・・・・・酷いねえ。」

イヴ！（後書き）

お父さん再登場！

オチなしイミなしイヴ番外。
明日はちゃんします。

クリスマスー！（前書き）

本編無視。

父再登場でもうすでに知り合ってることになっちゃってますが・・・

きにしないでください。
本編とは関係ありません！

クリスマスー！

「やあ、異界のお嬢さん。」

「……こんにちはセインさん。」

「やだなあお父さんって呼んでくれていいのに」

このノリについていけない。

ワタシが悪い？ いや悪くないよね！

「今日は聖なる日だよ？ 知ってた？」

クリスマス？ や、こちらの世界にキリスト教なんてないのだから違うのだろうね。

……あつたときも思ったのだけどこの人目開いているのかな？
聖なる日について何かと語っているのを見ながらなんとなく考えていた。

「というわけでこれを君にあげよう！」

「……え？」

『いりません』と反射的に言ってしまうところだった。
というかどうかしよう……全然話を聞いていなかったのだけど。
手渡された小瓶。中には淡い桃色の透明な液体が入っていて、液体が揺れる度にラメでも入っているようにきらきらする。

・・・・・・怪しっ！

「あの・・・・。」

これがなにかと聞こうと視線を上げると、先ほどまでいた人物はいなかった。

突然現れて突然消えられるとたいへん困るのだけど…。

まあいいや、聞けばわかるだろうと思いつてとりあえず誰かさがすことにした。

クリスマス二！

しばらくウロウロと歩きまわっていたらメガネくん・・・スイレアナに出くわした。

「貴様、そのクスリはどうしたんだ・・・？」

「セインさんに押し付けられたのだよ。」

「ああ、セイン様に・・・」

なんか哀れみの視線にかわった。

え、なんで？ ああそうか。みんなあのテンションについていけないのだね・・・

「これは何なのかな？」

「ああソレは・・・絶対男には渡すなよ。とだけ言っておこうか。」

「ふうん・・・？」

無表情だけれどどこか意地の悪い声音で意味のよくわからない返答をくれた。

訝しむワタシをみるスイレアナの瞳には面白がるような光がちらちらと見える。

どうやら、聞く人を間違えたようだ。

「まあ・・・気をつけるよ。」

「そうした方がいいだろうな。精々ががんばれ。」

・・・何を？

クリスマス二！（後書き）

メガネくん悪い人じゃないんです。

クリスマス三！

「シャノン？ どうしたんですか？」

桃色のツインテールを揺らしながらこちらに近づいてくるのはリシエ嬢。

聞くべきか聞かないべきか・・・よく考えてみればこのコが一番よくわからない人だったりする。

「いや・・・少し聞きたいことがあったのだけど。」

『やっぱりいいよ』と言いかけたのだが、何故かスツと目を細めたりシエ嬢。

その視線の先はワタシの手に握られた小瓶。

おや？ 嫌な予感が・・・

「それ・・・どこで手に入れたんですか？」

につこり

ヒツ・・・！ こここ怖いよキミ！！

ワタシが自分で入手したわけじゃないから！

「セインさんに頂いたんだよ。」

一瞬キョトンとして目を伏せたりシエ嬢。

憂いているようなその表情はとても綺麗だが小声で呟かれることは

全然綺麗じゃない。

『あのクソ親父が……』とか、『くだらないことしやがって……』とかとどこどこ聞こえてくる言葉がいつもと違いすぎる。

……というかあの人は子ども二人から嫌われているのか、可哀そうに。

リシエラ嬢は最後に大げさにため息を吐いてワタシを見据えた。

「それ処分したほうがいいですよ。ある意味毒ですので。」

「ある意味ってどういうことだい？」

うわあ、凄く嫌な予感がする……スイレアナの言っていたこともあるし。

「まあ……所謂媚薬っていうやつですね。」

そんなモノをワタシに渡してどうする気だったのだろう。
まあ考えたくもないけれどね！

とにかくさっさと処分してしまおうと自室へ戻ることにした。

「ああ、僕にくれるんなら喜んで貰いますけど？」

「絶対にあげたりしないから安心していいよ。」

可愛らしく首を傾げてダメだからね！
あとキミ目が本気……深く考えるなワタシ。

クリスマス四！

「シャノン？どうしたの？」

「うわぁっ！」

盛大に驚いてしまった。

うわぁ恥ずかしい。まだドキドキとなるのを抑えようとしながら振りかえる。

いつもどおりの・・・けれどもどこか探るような笑顔をした魔王がいた。

なんとタイミングの悪い。ちょうどこの小瓶を消そうとしたところで登場するとは・・・

「ノックくらいしたらどうなのかな？」

「それじゃあつまらないよ。」

なにが！？

突っ込んだらきつと素敵な笑顔でなにか言われそうなのでやめておいた。

「それよりさあ、シャノン？」

「なにかな？」

「それ、ナニ？」

指差したのは例の小瓶・・・これについて問われたの今日何回目だろ。

というか魔王、絶対コレが何かわかって聞いているよね？

「セインさんから頂いたんだよ。」

押し付けられたという方が正しいけども。

『ふうん？』と呟いてジッとそれを見つめる魔王。え、なにどうしたの？

ひょいとその小瓶をワタシから取り上げると窓際へ行き、光に翳すようにして月の方へとむけた。

「ああ、やっぱりね・・・シャノン、おいで？」

そのまま窓を開けてバルコニーへと出た魔王。

手招きをされ後へ続くと淡く微笑まれた・・・顔に熱が集まっっているような気がするのには気のせいだ！

「よく見ててね？」

パンツと音がしたと思ったらあたりに散った液体。

それは夜空に散らばりきらきらと淡い色で煌めいていて、とても幻想的で美しい。

「キレイでしょ？」

「・・・そう、だね。」

「セインは昔僕らによくこうして見せてたんだよ。」

「こういう事だけはよく思いつくよねえ・・・なんて呟く魔王。

「聖なる日なんて馬鹿馬鹿しいけどとは思っけど、シャノンとなら別にいいかもね。」

なんて、今の風景よりもキレイな笑顔で言われてしまうと・・・
本当にキミは、心臓に悪いね。

けれどそのキレイな笑顔も一瞬で、次には爽やかな笑顔・・・あれ、嫌な予感がするぞ？

「それじゃ、ベッドにでもいこうか。」

「今の感動を返してくれ・・・。」

クリスマス四！（後書き）

間に合わなかった！！

最近魔王組が出番少ないのでクリスマス番外は出張ってもらいました！

番外が四！まで続くななんて奇跡・・・！
しかも拍手のお礼文も変えられるなんて・・・！

甘さが足りない気もいけませんもう限界・・・しかたないよ、
明日餅つきだもん（関係ない）。
代わりに拍主文の方が若干甘いです。

キマグレ24！

「久しぶりだねえセス。」

「え？なんでそんなに怒ってんの？」

「え？むしろなんでキミ相手に怒れないでいられるのかな？」

怒るに決まっているじゃないか。

そうしてなんだい？　ワタシを呼び出すなんて・・・これは厄介事決定かな？

「話が早くて助かるな。」

「まだ何も言っていないけど？」

「『ふざけんじゃねえよ』みたいな表情だったから察しがついたんだろう？」

「いや、あのキミ・・・ワタシの性格を誤認しちゃっているみたいだけど！？」

ヒクリと引きつり若干歪な笑顔を浮かべるワタシ。
そんな表情滅多にしないからね？

「まあいい。それより・・・」

「ワタシ的には非常によろしくないけども。」

「お前と同じセカイにいた人間が一人“落ちて”きた。」

「そう。」落ちて“きたということ”はセスが喚んだワケじゃないんだね？で？地上に直接降りられないキミがワタシを呼び出したというのは……ワタシに連れ戻してきてほしいワケだ。」

なんて都合のいい駒なのだろうね、ワタシは。
腕を組み、考えるような素振りをしてセスを軽く睨んだ。

というか。こういうのはこの世界の地理に詳しい人たちに頼めばいいんじゃないか？

「気付いてたんだな、俺が下に降りられないこと。」

「夢の中でとか、声が聞こえたとか……そういうのはあるのに地上に降りてきたという記実はなかったからね？キミは“降りてこない”んじゃないくて”降りられない“んじゃないかと思ってね。」

「ああ……そういうトコ頭回るよねお前。」

「どういうイミかなそれは？」

「またもヒクリと口元が引きつった。」

「まるでどこか違うところでは頭が回らないみたいと言いが腹立つ……！」

「まあいいや。」

「いいのかよ！……まあ、切り替えが早くて助かる。」

「どこに落ちたのかな？」

「ちょうどお前が最初にいた森の中心部あたりか。」

「そう、うんまあ……わかったよ。」

なにやら呼び戻されるような感覚が急におそってきた。
ちよつとびっくりしちゃったじゃないか……。

「セス？」

「俺じゃないぞ！？ これは魔王あたりだろ……。それにしても、
強引に呼び戻そうなんてやってくれんなよ。」

深いため息を隠さずもらすセス。

「……いや、溜め息つきたいのはこっちなんだが。」

「じゃあよろしく頼んだぞ！」

「断つても無理やり押し付けただらうねキミは。」

嫌味な笑顔を貼り付けて軽くてを振った。

次に目を開ければきつと夕鶴さんあたりがいるのだらう……。

キマグレ24！（後書き）

遅くなってすみません・・・！！

受験生・・・とうとう私も受験生・・・更新遅くなると思います。
さすがに一ヶ月以上はあけません。（。。；）

・

「おはようございます、シャノン様。」

「え？なんでキミに膝枕なんてされているのかな？」

起き上がろうとしたら肩を押さえつけられた。

ちよっ、なにキミ起き上がれないんだけど・・・！

「^{セス}世界神に、何を言われたの？」

世の男性が一発で陥落しそうな微笑をたたえて問いかけられた。

『キミには関係ないだろう？』そう言つて素晴らしい笑顔を拝むことになるのは目に見えているのでここは大人しく白状しようじゃないか。

アレ？なんだろうこの敗北感。

「・・・と、いう訳なんだよ。」

「ふうん。そういえば彼女、君の名前呼びながら爆走してたよ？」

「へえそう。知り合いかな？・・・ところでキミ。なに。その見てきましたよ発言。」

「来る途中で見かけたんだけど、どうでもいいから素通りしてきた」

・・・酷くない？

しかも『彼女』と言ったよね？女性なのだよ？女性が一人見知らぬ森の中で一人困っていたら助けてあげるのが普通だろう！？

「女性に対する態度やなんやらを小一時間ほど説いてあげたいくらいだけど、そのコを助ける方が先だね。」

なんか呆れられたような視線がきたけれど気にしない。

・・・というかキミ、なんというか・・・ねえ。なんでそんなに平然としてるの。

うあああイヤだ。ワタシが一瞬でもそんなことを気にしてしまっているのが非常にイヤだ！

ああ情けない。

・

「あ、確かこの辺りだよ。」

「ああ・・・わかった。」

色々と考えているうち、いつのまにか目的地に着いたようだ。

暗い森の中を暫くきよろきよろと辺りを見回していたら人、の声らしきものが聞こえてきた。

・・・なんか近づいてきてない？

「ねえ・・・」

「ん？なに？」

「なんか物凄く聞き覚えのある声・・・おや？」

とりあえず避けた。

「酷い！」

「飛び掛ってくるキミが悪いよ・・・」

普通に抱きつかれるのだったら避けないのだけど、今の抱きつくような勢いじゃなかったら・・・

「えっと、如月さん・・・？」

「はい！」

ポニーテールを揺らしながら叫んでいる彼女は確か『如月夕菜』。
出会い頭に抱擁つきの挨拶をかわすほど仲がよかったわけではない
だけだね？

「ところで、大丈夫？ ケガとかしていないかい？」

しゃがみこんでいる彼女に視線を合わせて問いかける。

「そんなところが大好きです先輩！！」

どんなところ！？

とつつこむ余裕もないほどの激しい抱きつきようだった。いや、嫌
なわけではないのだけどね・・・とりあえず苦しいので話して欲し
いかな！

「愛の告白はもういいからとりあえず離れない？」

べりつと彼女が離れたと思ったら、魔王が彼女をはがしたようだ
った。

なんだろう・・・背景の黒さが三割り増しな気がする。

・

「彼女？」

「ワタシに女性の恋人がいると言いたいのかなキミは。」

何故か魔王城で、しかも何故か魔王の私室で、どうしてあの場所の落ちてきたのか聞こうとしたら何故かワタシの魅力について熱く語りだした彼女。
そんな彼女を見てぼつりと呟いたのが先ほどの一言だった。

「わたし嗚音センパイが心配だったんです！」

悲しそうな表情でうつむく如月さん・・・あれ？

「ワタシは向こうで何日いないことになっているのかな？」

「え？わたし嗚音センパイが目の前で消えてすぐに追いかけてきたのでわかりません。」

え、なにそれ。

ということは、向こうでは全くといいほど時間がたっていないということなのかな？・・・わからない。

「ふうん・・・キミ自力で追いかけてきたの？」

「セーンプーイ。誰ですかこのチャラチャラした感じの銀髪野郎。」

ちやらちやらした銀髪野郎ってキミね、そんな言葉使わない方がいいよ。

というか今話逸らしたよね。ワザとだよね？

「それで？これからどうするの？君。」

え、なんでそんな冷たい言い方？魔王如月さんに冷たくないかい？そんな彼に、意味がわからないというふうに顔をしかめる如月さん。

「どうするって、センパイと帰るに決まっているじゃないですか。」

魔王の笑顔ついでに空気まで凍りついたきがした。

・

「あーあ、ねえ本当勘弁してよ。」

魔王が疲れたようにため息をついた・・・

「やだなあ全く。父親の顔見てため息つかないでヨ。」

魔王の父親らしい人を目の前にして。

前髪を鬱陶しそうにかきあげながら、その眉間には盛大に皺が寄せられていた。

魔王と同じ銀の髪に、開けているのか開けていないのかわからない狐のような目。

随分と若く見える・・・というか、若いな。

「ん？どうしたのかな異界のお嬢さん？」

「随分若いですね。」

首を傾げる仕草とか似てる。親子だね。

「そうかい？それはどうもーでもお父さんって呼んでくれちゃっていいよ」

「・・・ウザッ」

吐き捨てるように言った魔王はたいそう機嫌がよろしくないようだ。

腕を組み明後日の方向へ顔を向けている。反抗期ってレベルじゃないよねコレ。

「あそうそう、私はセインというんだ。セイちゃんって呼んでくれてかまわないよ。」

「遠慮します……。」

苦手なタイプみたいだった。

少し引いていたらセインさんがパンツと手を叩いて何がおかしいのかクスクスと笑って言った。

はやくもテンションに置いてけぼりをくらった。

「ちなみに私は神代理っていうのもしてるんだけどー。今日はキミ達に重大なお知らせがありまーす」

なんかさらっと凄い事言っただけつつこまなくていいのか……いいか。

というか重大と言いつつ全然重大そうじゃないなと思っていたら、スツと目を開かせたセインさんの鮮やかな牡丹色の瞳を見て思考が一瞬止まった。

「キミ達には至急帰ってもらいます」

爆弾が投下された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0910k/>

キマグレセカイ

2011年11月26日22時45分発行